平成２８年度
秩父市・豊島区　『生涯活躍のまちづくり』
ワークショップ報告書

平成２８年２月

はじめに

秩父市と豊島区は、1983 年 10 月に『姉妹都市』となって以来、双方のイベント参加や住民レベルの交流など、33 年以上も様々な形で交流を続けています。

2014 年５月、秩父市と豊島区は、両自治体とも「消滅可能性都市」の指摘を受けました。豊島区は２３区で唯一の指摘でした。本区では直ちに「消滅可能性都市対策本部」を立ち上げ、その対策を検討する中で、「地方との共生」を対策の柱の一つに据えました。本区は様々な地域からの転入人口に支えられており、地方が衰退すれば、長期的には、本区も転入人口が減り衰退していくと考えたからです。

そこで今回、本区は、最も親交の深い交流自治体の一つである秩父市と、「地方との共生」のあり方を検討するため、両自治体協働で『生涯活躍のまち』（日本版 CCRC 構想※注）を考える住民参加型ワークショップを開催しました。

本報告書では、ワークショップにご参加いただいた皆様の活動状況を記録し、「提案書」として取りまとめました。限られた時間の中で、皆様のご協力によりまとめあげた試みですので、今後、具体的な課題解決のためには、さらなる検討が必要です。

今回のワークショップでは、『まず秩父市民と豊島区民の多世代交流が大切である』とのご意見を多くいただきました。また、空き家活用など、秩父市にある既存の地域資源の活用も提案されました。

このような、秩父市と豊島区の「共生のまちづくり」が地方創生のモデルケースとなり、「生涯活躍のまち」の実現、ひいては日本全体の元気につながるのではないかと私たちは考えています。

今回のワークショップでは、秩父市関係者、公募の豊島区民、そして特に、立教大学セカンドステージ大学と大正大学の皆様に、運営に際し多大なご協力をいただきました。この場をお借りして、参加者の皆様に心より感謝を申し上げますとともに、今回のワークショップをきっかけに、参加者の皆様が秩父市と豊島区の架け橋となっていただくことをお願い申し上げます。

平成２９年２月
豊島区政策経営部企画課

※注　日本版ＣＣＲＣ構想（日本版 CCRC 構想有識者会議）
東京圏をはじめとする地域の高齢者が、希望に応じて地方やまちなかに移り住み、移住先の多世代の住民と交流しながら健康でアクティブな生活を送り、必要に応じて医療・介護を受けることができるような地域づくりを目指すもの。

ー 目 次 ー

ページ

１． 生涯活躍のまちづくりワークショップの目的 …… ３

２． ２８年度ワークショップの内容と進め方 …… ４

３． ワークショップ開催報告

３－１ 第１回 基調講演 …… ５

３－２ 第２回 秩父市現地見学ツアー …… １２

３－３ 第３回 グループワーク１日目 …… １５

３－４ 第４回 グループワーク２日目 …… ２２

３－５ 第５回 本発表会 …… ２８

４． まとめ『秩父市と豊島区 生涯活躍のまちづくり提案書』… ４２

1　生涯活躍のまちづくりワークショップの目的

人口減少社会や超高齢社会を迎え、今後も日本社会全体が活力を維持していくためには、様々な地域との共生が欠かせないと私達は考えています。『姉妹都市』である秩父市と豊島区が連携し、移住のあり方、そして高齢者も若者も共に活き活きと暮らし続けられる多世代共創のまちの実現を目的としてワークショップを開催しました。

秩父市と豊島区の住民協働により、魅力と活力ある地域の実現、都市と様々な地域の共生のあり方について考え、住民提案を取りまとめました。

ワークショップの目的：秩父市全体が『生涯活躍』の舞台となる魅力あるまちづくり

↓

平成 28 年度成果：生涯活躍のまちづくり実現のための住民提案

↓

今後の展開：具体的な活動への展開（お試し移住等、秩父市との移住・交流促進事業）

【平成 28 年度ワークショップ参加メンバー】

- 公募の区民（在住、在勤、在学）（地方移住に興味のある概ね 20～６０代の方）
- 秩父市推薦の者、秩父市職員

【運営協力】

- 立教大学セカンドステージ大学（※１）
- 大正大学
- NPO 法人ゼファー池袋まちづくり（※２）

（※１）立教大学が設置する、50 歳以上のシニアのための人文学的教養の修得を基礎とし「学び直し」と「再チャレンジ」のサポートを目的とした新たな学びの場。

（※２）池袋を中心に、安全で安心できる地域環境を整備する事業、国際交流事業、地域活性化イベントなど、幅広くまちづくり事業等を展開するＮＰＯ団体。

2　28 年度ワークショップの内容と進め方

平成２８年度は７月～１２月の間で成果発表会を含め全５回開催しました。

《各回の主な内容》

【第１回】　７月２３日（土）基　調　講　演
講演：「ピンチをチャンスに変える生涯活躍のまち、いつまでも輝けるひと」
講師：三菱総合研究所主席研究員　松田智生（まつだともお）氏(日本版 CCRC 構想有識者会議委員）

【第２回】　７月３０日（土）秩父市現地見学ツアー
現地視察を通じて秩父市を知ろう！
秩父の魅力を探るべく秩父市の景勝地等をまわりました。

【第３回】　８月２０日（土）グループワーク１日目
テーマ ①「豊島区と秩父市のお互いのまちの魅力を語ろう!」
テーマ ②「どうすれば姉妹都市としての交流が深まるか?」

【第４回】　８月２７日（土）グループワーク２日目
テーマ ③「生涯活躍のまちとして住みたくなるまちづくりとは」

【第５回】ワークショップ成果発表会　１２月１０日（土）
秩父市長、豊島区長に政策提案書を提出、パワーポイントによる
各グループのまとめ発表、パネルディスカッションを行った。

《ワークショップの進め方》

（１）豊島区民と秩父市関係者による協働での作業
地方への移住・交流に興味のある参加者を募りました。また、関係する部門の秩父市職員も参加し、区民と行政の協働により作業を進めました。

（２）グループによる作業
グループワークでは、１つのグループにつき１０名程度として、５つの班で作業を進めました。グループごとのファシリテーターを中心に意見や提案を集約しました。

（３）検討内容の共有化
グループごとに検討していただいた内容は、必ず発表時間を設け、検討内容を全員で共有化するようにしました。

3　ワークショップ開催報告

３－１　第１回ワークショップ　－基 調 講 演－

（１）開催概要

◆開催日時：平成２８年 ７月23日（土）　午後２時～4時
◆開催場所：豊島区役所本庁舎 ５階 507～510会議室
◆講　　師：三菱総合研究所主席研究員　松田智生（まつだともお）氏（日本版CCRC構想有識者会議委員）
◆講　　演：『ピンチをチャンスに変える生涯活躍のまち～いつまでも輝けるひと』
◆次　　第：　1．開会挨拶
　　2．基調講演
　　3．質疑応答
　　4．閉会挨拶

（２）講演内容

移住・交流を進めていくなかで、重要となるいくつかのキーワードについてお話しをいただきました。

◆脱･元気の出ない四字熟語

最近は、「消滅都市」、「介護難民」、「熟年離婚」等、巷には元気の出ない四字熟語が目立っています。しかし、今求められているのはその解決策です。具体的に何をやるかというアクションを起こすこと、それがピンチをチャンスに変えるということです。日本は２６％の高齢化率（世界で１番目）ですが、果たしてこれが悪いことかというと、私はそうではないと思います。なぜかというと、海外からの観光客、あるいは三菱総研に在籍する外国人社員に聞くと、日本ほど「アクティブシニア」に溢れた国はないといいます。空港やホテル、商店街でこれほどまでに活き活きと働くアクティブシニアの姿に、外国人も驚くほどだそうです。シニア世代を「コスト」ではなく「担い手」として捉える逆転の発想が、これからは大きなポイントになると考えています。

◆50／55 問題

ピンチをチャンスに変えるというなかで、ピンチは何でしょうか？現在、日本は税収５５兆円で、医療費に４０兆円、介護給付費に１０兆円という現状です。これは、月収５５万円の人が医療費と介護費に５０万円を使っているイメージになります。恐らく豊島区も秩父市もこの財政状況と同じになることが想定されます。税収は限られているが、医療費と介護費は増える。ピンチというのはこのことです。これが「50／55 問題」です。

それを解決するのが、『生涯活躍のまち』です。消費、雇用、産業を興し、税収を増やすことだけでなく、医療費の抑制も可能になります。社会参加や生涯学習、健康支援を徹底すれば医療費は抑制できます。実は医療費というのは、市町村では 3 倍から 4 倍も差がある。ピンチをチャンスに変えるというのが、今回の話でいうところの、50／55 問題を解決するということ。それが、生涯活躍のまちということになります。

◆「生涯活躍のまち」をめぐる誤解や先入観

生涯活躍のまち（日本版ＣＣＲＣ）は、アクティブシニアを中心に地域社会と連携してまちが活性化するというモデルです。ただ、これは国やマスコミの伝え方にも問題があったゆえに、大きな誤解や先入観があります。

まず、主語の問題です。国の提言の主語が「東京の介護が大変だから地方に移住しましょう」と聞こえてしまうことです。それでは前向きな動機になりません。「秩父が輝くためには首都圏のアクティブシニアとどう連携するか」など、「私が」輝くためにこれからのセカンドライフ、セカンドキャリア、住まい方はどうするかという、自分主語か地域主語にしていないというところに課題がありました。

二つ目は、根強い「姥捨て山」のイメージです。介護者が住むのではなく、元気な人が交流する、そして、二地域居住や将来移住につなげていくことが、生涯活躍のまちの本質になります。

三つ目が、高齢者が移住すると、逆に高齢化が進むのではないかという誤解。そうではない。今の地域の課題は何かというと、私は雇用に尽きると思います。雇用がないから若者が出ていくわけです。けれども、今回話すアクティブシニアタウンを作れば、様々な雇用が生まれます。だから、若年層が出て行かず、働き盛りがくる。逆転の発想というのは、アクティブシニアをもってして若年層や多世代を呼び込むということです。

◆両自治体住民へのメリット

移住・交流において、移住者だけがハッピーでいいのかという問題がある。移住した、あるいは二地域居住している豊島区民だけがハッピーでいいという話ではないでしょう。今回の移住・交流を通じて逆に秩父市民の方が生きがいを見つけられるようなものになることが理想です。北海道の浦河町という小さなまちは、「移住お助け隊」というものを町民が作り、このようなまちとまちとの交流が町民の生きがいや健康につながっています。

健康寿命が延びることにつながれば医療費を抑制できる、産業も単なる老人ホームではなくて、色々なビジネスが生まれるでしょう。そして、学校も少子化でこれから子どもが減るかもしれません。そういったときに、アクティブシニアが学校でもう一回学ぶ。そして、学んだことを地域に生かす。さらに、アクティブシニアの経験や知見を子どもたちが学ぶ、一緒に体験するということが多世代共生のメリットにもなります。

また、このような秩父市民・豊島区民の両方のメリットを「雇用で〇〇万円、住民税で〇〇万円」など、数値で示すことが大事でしょう。

◆どのような「ＣＣＲＣ」が考えられるか（事例紹介）

<u>◇趣味型ＣＣＲＣ◇</u>

趣味を確保したモデル。釣り大好きで全国を回ったのちに高知を選び、東京から移住したというケース。今、彼と『高知版生涯活躍のまち』を検討中。日本中の釣好きを集め大会を催したり、すし屋を作ってそこでとれたてのすしを提供する。さらに、そこから観光客を呼んで地産地消したり、または外に売ったりすることでお金を稼ぐ。

<u>◇転勤族の恩返し型ＣＣＲＣ◇</u>

東京生まれ東京育ちだが、支社長として４年間長崎に赴任。その後、早期退職し４年間赴任した長崎に恩返しをしたく移住を決意。長崎では、地元の大学職員として働くだけでなく、同大学の野球部のコーチも担っている。また妻は東京にいるため別居中だが、年に数回会える時に「嫁のありがたみ」を感じられ、逆に仲が良くなったという『ハッピー別居（卒婚）』例でもある。

<u>◇大学連携型ＣＣＲＣ◇</u>

これは、破綻寸前だった大学が、敷地内にシニアの住まいを作るとともに、シニアの大学を作った。入居条件は年間 450 時間以上授業を受けなければいけないというもの。そこも、今やウェイティングリストができるほどの人気大学となり、シニアが学生向けに、あるいはシニアがシニア同士で教える授業が人気を呼んでいる。例えば、豊島区にある立教大学や教育機関が秩父に分校を作ってみてはどうか。

◆アメリカのモデルとの違いは何か？

移住・交流を進めていくうえで大切なことは、アメリカのいいところを生かして、日本の社会特性や地域特性に合ったものは何かということを理解することです。アメリカは、犯罪が多いため塀で囲われているけれども、日本ではもっとまちに開かれたモデルが適していると思います。住む人も高齢者だけでなく、そこに若者や子育て世代が住んだってかまわないわけです。新規に作るのではなく、日本はストックの宝庫です。公共施設、団地、移転したキャンパス、廃校、撤退した大型商業施設や稼働率の悪い旅館やホテルなど、ありとあらゆるストックがあります。それをうまくリノベーションすればコストも安く済みます。

「箱モノ」をつくるのではなく、ハードとソフトの仕組み、またそれを支える制度が大事となってきます。このようなモデルは、日本にも参考になるコンパクトシティ型のモデルです。まち丸ごとでＣＣＲＣのモデルとしていくことが、日本版ＣＣＲＣにふさわしいのではないでしょうか。

◆「生涯活躍のまち」を実現させるための提案

◇要介護度改善への成功報酬制度◇

事業者の努力等により、居住者の自立度や要介護度が改善されたら、その事業者に対して国が奨励金を出したり、あるいは法人税の減税をするという「健康インセンティブ」をするということ。

◇社会活動ポイント制度◇

もし、秩父のために 50 時間働いたら、または秩父で 50 時間学んだ等、元気なうちに地域に貢献したことがポイント化される制度。そのポイントは地域通貨や商品券など、自分の将来のために役立てられる。

◇第二義務教育制度◇

５０代になったら、もう１回学校へ通う義務教育的な制度。内容もまちの課題や歴史を学んだり、体育の時間では転倒防止や骨粗鬆症を学ぶといったカリキュラム。

◇住宅の流通促進◇

もし家を売る、買う等したときに減税、あるいは自宅をリノベーションする、そういうときに補助するといったものがセットになるということ。

◇逆・参勤交代制度◇

例えば経団連傘下の企業は、社員の１割を年間１か月地方で働かさなければならない

というアイデア。そうすれば様々な地域にオフィスができ、住宅もできる。またはレッドアロー号の運賃を安くしたり、移住割引をつくる。あるいは、IT の大容量のインフラを作って、パソコンを持っていけば秩父で仕事ができる。さらには、大学の授業をリモートで遠隔授業できるようなものが整備されるといったようなことも考えられる。

◆「わが街の生涯活躍のまち（日本版ＣＣＲＣ）」

◇名称：「〇〇〇〇ビレッジ」を皆で考えましょう◇
自分が住みたくなる、移住者が住みたくなる、「年賀状に書きたくなる」名称を！
・長瀞清流ビレッジ　・ひまわりビレッジ　・ワクワクビレッジ
・秩父酒飲みビレッジ・若ドシマビレッジ　・グリーンビレッジ
・カエデ、ヤギ、ウィスキービレッジ
など、講演会参加者の方々からユニークなアイデアを多数いただきました。

◆まとめ

今回の講演会でのキーワード
・前向きな解決策を出すことを意識しグループワークに取り組むこと。
・シニアは地域の「コスト」ではなく「担い手」である。
・「逆転の発想」ピンチの中にチャンスあり。
・「移住者」と「秩父市民」がともにハッピーになれることを忘れない。
・ユーザー視点のストーリー性とワクワク感。
・一歩踏み出す勇気と学んだ後にそれを活かす機会を積極的に求めていく。
・雇用や税収がどのくらい増えたかという経済波及効果と、それに向けた綿密な準備。

今日、2016 年 7 月 23 日をターニングポイントに、つまりこの日をきっかけに秩父と豊島の新たな連携を一歩踏み出した日にしたい。その一歩というものは、一区民一市民、あるいは一職員が踏み出すだけでは小さい一歩かもしれませんが、今日ここに集まった志の高い人々が皆一歩踏み出せばそれは大きな一歩となると私は思います。今日、私の話したことが、皆さんの新しい気づきやこれから一歩踏み出すきっかけになることを願っています。

５．　質疑応答

講演を聴いた参加者の方々から、松田氏へ質問をお伺いしました。

○参加者（女性）

移住とは「裕福な人」が対象なのか。また、CCRC とは、収入が低く税金を落とさない人は受け付けず、若い子育て世代で税金を落としてくれる人がターゲットなのか。

○松田氏

非常に良い質問です。恐らく、今多くの人が思っている先入観でしょう。まずターゲットは裕福な人ではないかということですが、そうではありません。シニアマーケットを見たときのピラミッドで言うと、上位の２割くらいの人たちは裕福でどこに住んでもやっていける人たちです。また、生活保護ですとか、介護、困窮層、あるいは本当に医療が必要な人は２割くらいいて、これは行政が救済する対象です。私が思うのは、６割を占める中間層の人々です。この層の人たちが元気に過ごして消費して、税金を納めて、社会保険料を納めて、経済波及効果を生み出すことが、先ほど申し上げた 50／55 問題を解決することにつながることと考えています。

○参加者（男性）

CCRC という話をすると、R(リタイアメント)の解釈で定年退職された高齢者の方が対象なんだという先入観が非常に強いと思いますが、リタイアメントというものを幅広く捉えて、子育て中の若い世代も対象になるという認識でよろしいでしょうか。

○松田氏

まさにそのとおりです。「住む人」というのは、米国ではリタイアメント・コミュニティですが、日本は多世代でやるべきだと思っています。例えば、ある土地で住んでいる方はシニアですが、農園にサラダファームという新しいベンチャーが入ってきて、それを運営しているのが若い人たちなのです。その周辺に若者の住まいが建ちはじめ、環境が良いから子育てにも良い。だから、子どもを連れて移住する。このように、アクティブシニアだけが対象ではなく、これは多世代のコミュニティだと言い切って構いません。

○参加者（男性）

シニアというよりも、まずは働き世代の 30～40 代の世代を取り込んでいくことが一番大事なのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

○松田氏

私も同感です。ただ、それには雇用が必要となります。今Uターンやｉターンで働き世代が移住をためらうのは、地元に雇用がないことが大きな要因です。ポイントは若手ベンチャーです。良いものをもっているのだけれど、彼らの悩みは商品の販路開拓や営業のチャネルがないということ。例えば、農園で取れた有機野菜を地元で食べるのではなく、外に売って出たいというときに、東京のフレンチやレストランを知っているシニアは結構います。そうすると、直に販路開拓のサポーターになってくれるといったようなことも考えられます。雇用を生み出して、若い世代のサポーターとしてシニアが活躍していくことも大事なことだと思います。

○参加者（男性）

「事業主体の形成」というワードがございましたが、行政と事業主体との関係について何かアドバイスがあれば教えていただけますでしょうか。

○松田氏

そこも今回の肝です。現在、260 の自治体がＣＣＲＣに取り組みたいと言っていますが、共通した悩みは自治体が計画をつくっても「担う事業者が現れない」ということ。それは何故かというと、採算性がないからです。よって、行政は事業主体が健全に事業を回すためのサポートをしなければならない。それは、法人税の減税であり、あるいは頑張っている事業者に対しての奨励金や、共用部・レストラン・コミュニティースペースを作った場合に建設費を国が補助するなど、事業主体がやる気になるような仕掛けをつくることが、自治体の腕の見せ所だと思います。

○参加者（男性）

お年寄りになってから、移住するというのは難しいのではないかと思っています。もっと若いうちからお試し期間のようなものを作った方が良いのではないのでしょうか。

○松田氏

私もそう思います。移住というのは就職や結婚と同じで、いきなり決められるものではありません。助走期間というものがない限りうまくいきません。年をとってからではなく、若いうちから様々な地域で住む、働くということを経験しておくことが大切でしょう。

３－２　　第２回ワークショップ　ー秩父市現地見学ツアーー

秩父市の魅力を知っていただくことを目的に秩父市現地見学ツアーを実施しました。『秩父市と豊島区が姉妹都市として、どのような取り組みをすれば交流がさらに深まるのか？』『生涯活躍のまちとして、魅力と活力のあるまちづくりを進めるには、どうすれば良いか？』などのテーマについて、秩父市をまわりながら考えました。

（１）開催概要

◆開催日時：平成２８年 ７月３０日（土）　午前８時３０分～午後７時
◆開催場所：秩父市（午前８時３０分池袋発→午後６時４６分池袋着）
◆参加人数：３５人（豊島区側：３１名、秩父市側４名）※職員除く
◆見学場所：以下のとおり

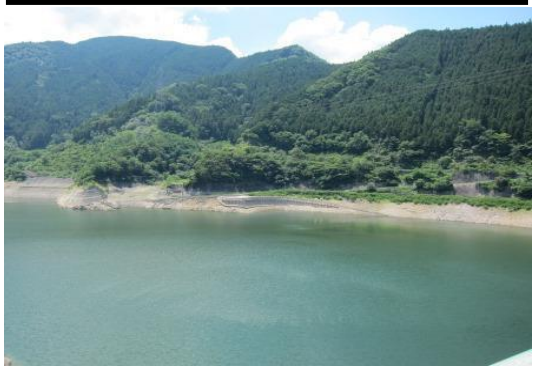
（２）現地見学ツアープログラム

午前８時３０分	池袋駅出発（レッドアロー号）
午前９時５２分	西武秩父駅着
午前１０時００分	秩父見学ツアーの概要説明 場所：秩父市歴史文化伝承館１階研修室 ※秩父市副市長挨拶
午前１０時１５分	出発（マイクロバスにて）

午前１０時３０分　　羊山公園

午前１０時４５分　武甲山資料館

午前１１時３５分　浦山ダム



午後１３時３０分　旅立ちの丘

午後１３時４０分　音楽寺(札所23番)

午後１４時１０分 地場産センター

午後１４時５０分　秩父神社

午後１４時５０分　まつり会館

午後１６時００分　　意見交換会
　　秩父市歴史文化伝承館１階研修室
午後１７時２５分　　西武秩父駅出発（レッドアロー号）
午後１８時４６分　　池袋駅着
午後１９時００分　　解散

　秩父市職員の方々のご案内のもと、秩父市の現状や魅力、「自然」や「文化」を肌で感じることで、グループワークに活かせる新たな発見を探ってきました。

（３）参加者の意見･感想

・自然や文化など秩父の魅力にたくさん触れることができた。このような秩父の魅力の情報発信が上手くできれば、秩父を訪れてみたい人や移住してみたいと思う人が増えるのではないか。
・秩父市の地元の人や商店の方々の思いをしっかりと聞いてみたい。
・アニメや文化等、秩父と豊島の共通の魅力を上手く繋げていきたい。
・施設やインフラを整備するだけでなく、既存のストックをリノベーションしたり活用していくことも必要ではある。秩父にはたくさんの資源があると感じた。
・「魅力のあるまちづくり」を進めていくうえで、行政だけでなく民間の力を巻き込んでいくことが大きなポイントとなると感じた。
・『番場通り商店街』は非常に魅力的だった。ここの商店街を活性化し、まちのにぎわいの起爆剤にすることはできないか。
・今まで、田植えやスポーツ大会等、秩父と豊島は多くの交流を続けてきたと思う。このような取り組みをもっと表に出していってほしい。

参加者の皆様からの意見や感想に対し、秩父市の方々も熱心に耳を傾けていました。

３－３　　第３回ワークショップ　－グループワーク１日目－

（１）開催概要

◆開催日時：平成２８年 ８月２０日（土）　午後１時３０分～４時３０分
◆開催場所：豊島区役所本庁舎５階　５０７～５１０会議室
◆参加人数：４２名（豊島区側：３３名、秩父市側９名）
◆次　　第：　１．開会挨拶、ワークショップの進め方の説明
　　２．グループごとにメンバーの自己紹介
　　３．グループワーク　テーマ①
　　４．グループごとにテーマ①のまとめ発表
　　５．グループワーク　テーマ②
　　６．グループごとにテーマ②のまとめ発表
　　７．講評
　　８．閉会挨拶

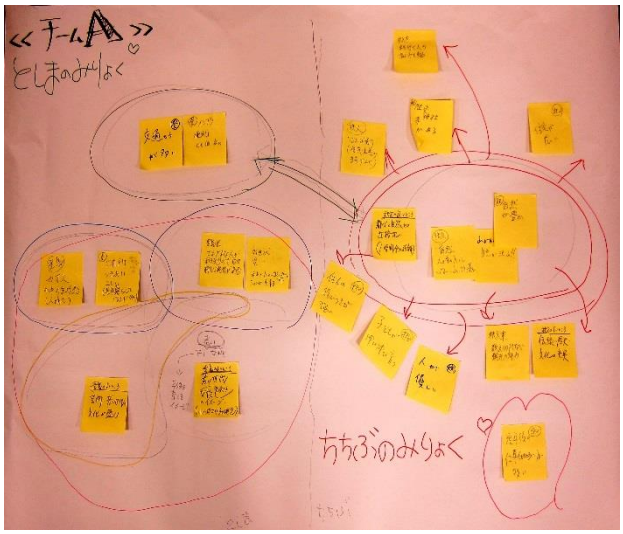
（２）グループワークの内容

テーマ①：豊島区と秩父市のお互いのまちの魅力を語ろう！

前回の秩父市見学ツアーを踏まえ、参加者の皆さんが感じている「豊島区・秩父市の魅力」は何か、グループごとに、意見交換をしていただきました。

◆ポストイットにまちの魅力を書き、模造紙に貼っていただきました。

A チーム
秩父市と豊島区の魅力



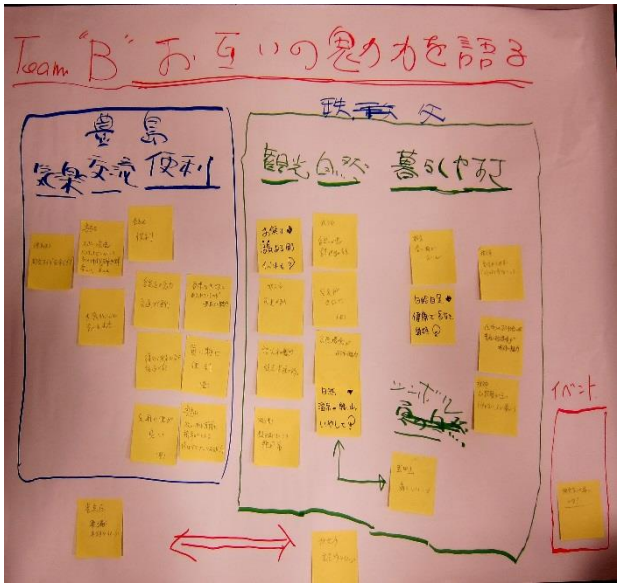
秩父市の魅力

・自然や緑が豊か。
・素晴らしい歴史と伝統がある
・観光資源が豊かである。
・地域の人々が優しく、おおらかである。
・仕事がたくさんある。

豊島区の魅力

・F1層の女性に対する取組み。
・ダイバーシティの取組み。
・地域の地域コミュニティが良い。
・世代間交流も広い。
・文化・芸術を育てる基盤がある。
・交通などのインフラが整っている。

B チーム
秩父市と豊島区の魅力



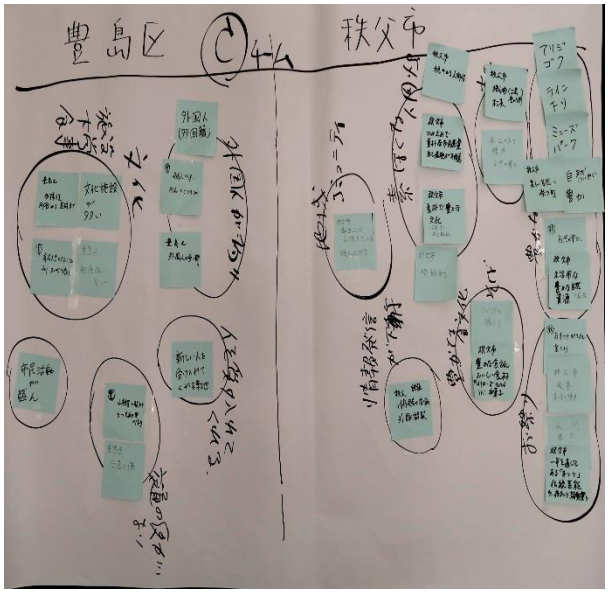
秩父市の魅力

・自然環境が豊か。
・祭りをはじめ、観光、文化、歴史がある。
・食べ物がおいしい。
・生活がしやすく、ストレスが少ない。
・「武甲山」等、市にとってのシンボルとなるものがある。

豊島区の魅力

・都会すぎず、田舎すぎず、バランスのとれたまちであるところ。
・交通が便利。
・池袋をはじめ、様々な地域から人が訪れるため交流が盛んであるところ。
・文化・スポーツが盛んであるところ。

Cチーム
秩父市と豊島区の魅力



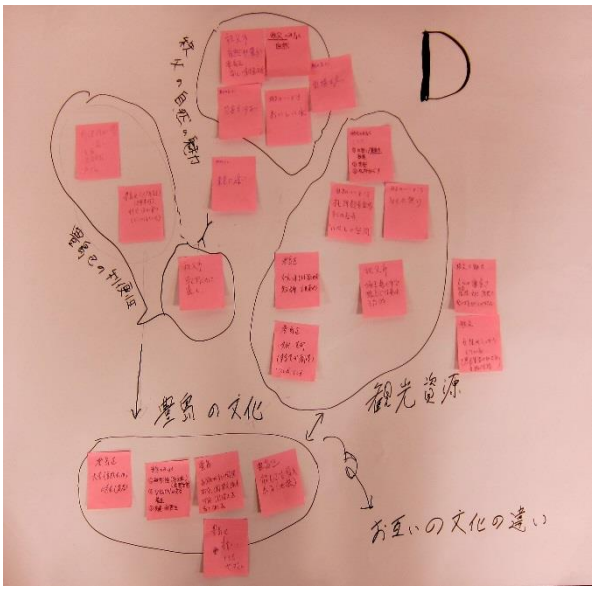
秩父市の魅力

・自然が豊かである。
・1年中お祭りをやっている。
・素晴らしい木工技術がある。
・地域コミュニティが豊か。
・控え目で素朴な人間性。
・ワインやウィスキー等、食資源が豊かであるところ。

豊島区の魅力

・文化施設が多いところ。
・飲食店が多い。
・外国人が多い。
・鉄道が多く交通の便が良い。
・市民活動が盛んであるところ。

Dチーム
秩父市と豊島区の魅力



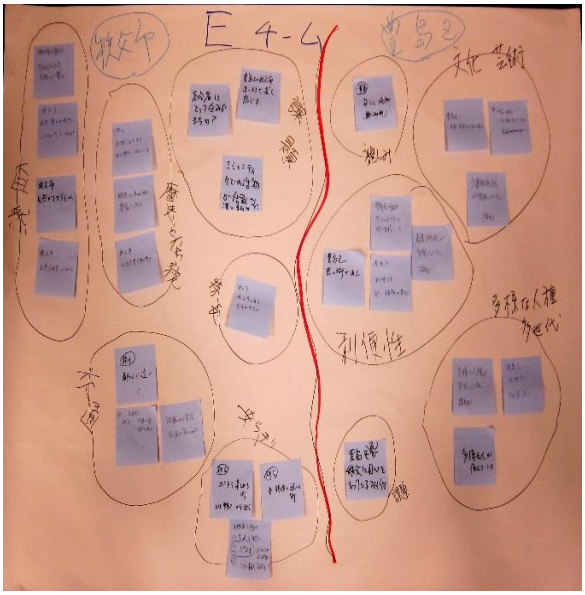
秩父市の魅力

・災害が少ない（地震にも強い）。
・歴史的文化財がたくさんある。
・おいしい水、豊かな樹木。
・豊かな自然が一番の魅力。

豊島区の魅力

・生活インフラが整っている。
・利便性が高い。
・歴史、文化がある。
・外国人が多く、国際交流も可能。
・先進的な取り組みが強い。

Ｅチーム
秩父市と豊島区の魅力



秩父市の魅力

- 自然環境が豊か。
- 歴史と伝統がある。
- 晴天率が高い。
- 災害が少ない。
- 池袋に約80分で行ける。
- 人情味と安らぎのあるまち。

豊島区の魅力

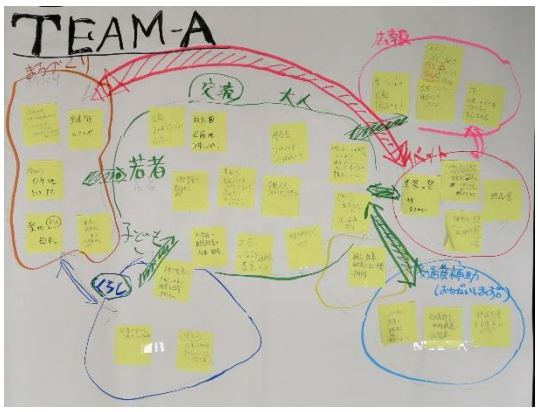
- 文化、芸術、学問の施設が整っている。
- 若者や外国人含め多様性がある。
- 交通の利便性が良い。
- 親しみのある場所である。

テーマ②：どうすれば姉妹都市としての交流が深まるか？

秩父市と豊島区は１９８３年１０月から３３年間『姉妹都市』として、絆を深めてきました。田植えや稲刈り体験教室、秩父市の「秩父夜祭」や豊島区の「ふくろ祭り」による交流や、豊島公会堂での「秩父ファンの集い」、過去には「豊島区・秩父市間リレーマラソン」を開催したこともありました。

このように、農業・文化・スポーツ等、様々な分野で、豊島区と秩父市は姉妹都市としての交流を深めてきました。そして、豊島区と秩父市が今後さらに交流を深めるためには、どのようなことに取り組んでいくべきか議論しました。

Ａチームまとめ発表

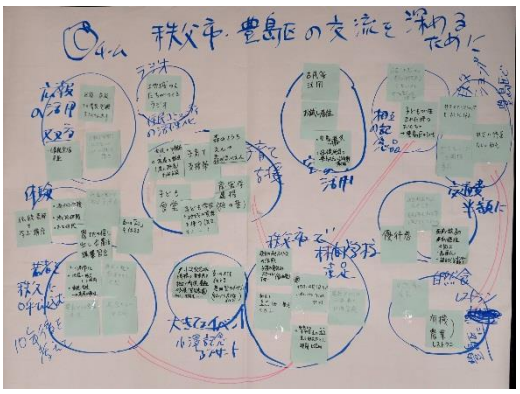


・遠足等のコースに秩父市を入れて、子どもの頃からの交流を増やす。また、秩父の子ども達を豊島区に呼び込むことも大事である。
・キャンプファイヤーなどのシニア世代が参加したくなるイベントも企画する。
・多世代ではなく、あえて同世代に絞ったイベントを開催する。
・小学校の勉強を通し交流の機会を作る。
・豊島区と秩父市共催の祭り等を企画する。
・広報紙などにお互いの情報を発信するためのスペースをつくる。
・池袋⇔秩父間の交通費の補助制度をつくる（西武鉄道の協力も不可欠）。
・お互いの商店街同士の交流を活発化させ、若者向けのまちづくりを進める。
・アニメの聖地のＰＲを強める。
・秩父市の子育てしやすい環境、仕事の斡旋、住宅の提供などの取組みを強化する。

Ｂチームまとめ発表

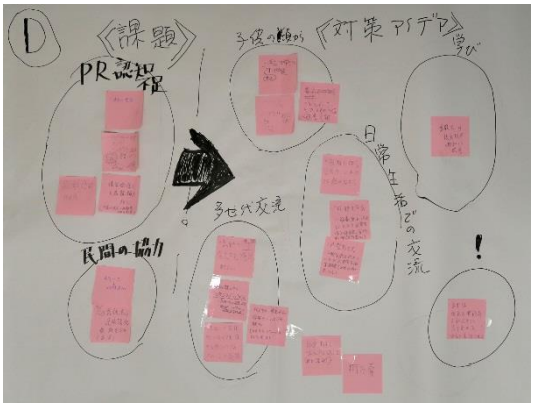
・ＳＮＳを活用し、秩父・豊島のお互いのまちのイベントを共有できるように、ＰＲおよび情報発信の工夫をする。
・「農」と「食」のコラボ。→秩父市でとれた農作物を豊島区の飲食店で活用する。
・秩父市で「畑体験」を行い、その作物をその場で調理し食べられる。
・お互いの地域の「日常体験」ができるような企画をつくる。
・高齢者から小さい子どもを含めた「ウォークラリー」など、お互いのタスキをつなぐようなイベントを行う。→秩父と豊島がつながる。
・子どもの頃から交流できるような仕組みをつくる（山村留学など）。
・秩父市にもっと大学や宿泊施設を作る。
→また、単なる宿泊ではなく豊島・秩父間でのホームステイなど。
・都会（豊島）、山（秩父）、海（未定）などの三地域連携を作り上げる。

Ｃチームまとめ発表



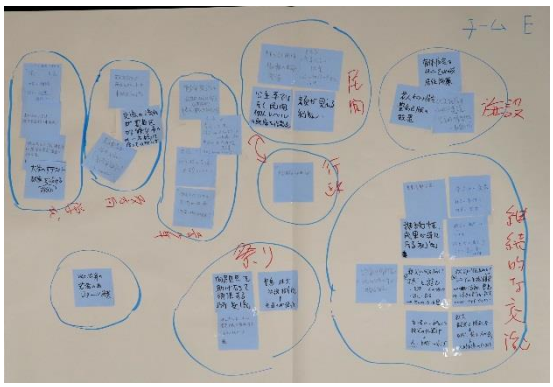
・子ども含め、若い人達に秩父を知ってもらう施策に取り組む。→サマースクール（空き地活用）、遠足（林間学校）で若者を秩父に呼び込もう！
・豊島区で子どもが産まれたら、秩父で作った木工のおもちゃをプレゼント。
・豊島区に「秩父ショップ」や「秩父自然食レストラン」をつくる。
・西武鉄道と連携し、将来的に池袋⇔秩父間を６０分で行けるようにする。
・秩父市の広報力を強化する。
・空いている資源をどんどん活用する。
・小沢記念コンサートのように、豊島区と秩父市でお互いの良さを活用したイベントを協働で育てていく。

Ｄチームまとめ発表



・秩父のＰＲ、認知活動を強化する。
・民間の協力は欠かせない（西武鉄道があったから、豊島区と秩父市は姉妹都市になれた）。
・「何かイベントがあれば秩父でやる」くらい、開催場所を秩父一色にする。
・子どもが、秩父の施設やプレーパークに行くときは交通費を補助する。
・気軽に滞在できるような施設をつくり、そこを多世代交流の場にする。
・豊島区と秩父市で「交流クラブ」をつくる。
・豊島区民と秩父市民の誰もが参加できるイベントを開催する。
・豊島と秩父で、日常生活を体験できる取組みを行ってほしい。
　→買い物やご近所付き合いが体験できる「１日豊島区民」「１日秩父市民」制度等。
・秩父市に立教のサテライト施設をつくる。
・豊島区民の記念樹を秩父市の公園等に植える。
・豊島区と秩父市の職員の交換制度を設ける。

Ｅチームまとめ発表



・サテライト施設、お祭り、住宅提供がメインになると考えている。
・年配の方が秩父に孫達を連れて行きたくなるような売り込み方をする。
　→キーワードは「孫、子ども、家族」。
・豊島区は活動、アクションする場（ON の場）、秩父市は活力を蓄える場（OFF の場）というように両者の役割を明確にする。
・「観光」で勝負するのではなく、人、自然、祭りをテーマに売り込む。
　→そのために往来しやすい環境を強めることが必要となる。
・豊島区のイベントに来た方には、秩父への優待券をプレゼントする。
・行政だけでなく、豊島区のシニア層が秩父を売り込む営業マンになるという意識をもって取り組むことが大切になる。

【グループワークのヒント！】 グループワーク２日目に向けて！

① 「掛け算」の視点
　「弱み」を補強するというより、「強み」を掛け合わせてみる。

② 「誰が」の視点
　「誰もが」幸せになるというより、「誰が」幸せになるか対象を絞ってみる。

③ 「自分ごと」の視点
　「他人ごと」ではなく、「自分ごと」として自分なら何ができるかを考える。

　上記の「３つの視点」が、まちづくりワークショップを進めていくうえで重要な視点になります。このような観点から、秩父市長や豊島区長に対し、まちづくりアイデアを提案していけるようグループワーク２日目を進めていきます。

３－４　　第４回ワークショップ　－グループワーク２日目－

（１）開催概要

◆開催日時：平成２８年 ８月２７日（土）　午後１時３０分～４時３０分
◆開催場所：立教大学 池袋キャンパス 本館2F １２０２教室
◆参加人数：４７名（豊島区側：３７名、秩父市側１０名）
◆次　　第：　１．開会挨拶・ワークショップの進め方の説明
　　２．各グループで前回の振り返り
　　３．グループワーク テーマ③
　　４．グループごとにテーマ③のまとめの発表
　　５．講評
　　６．閉会挨拶

（２）グループワークの内容

テーマ③：『生涯活躍のまち』として、住みたくなるまちづくりとは

前回、「豊島区と秩父市のお互いのまちの魅力を語ろう」「どうすれば姉妹都市としての交流が深まるか」という、２つのテーマでグループワークを行いました。

グループワーク２日目は、これを踏まえて、どうすれば「生涯活躍のまち」として「住みたくなるまち」をつくることができるか、皆さんで意見や考えを出し合いました。

秩父市全体が「生涯活躍のまち」となるイメージで「住みたくなるまちづくり」を考え、もし秩父市に住むとしたら、住まい、働く場、趣味、生きがい、学び、健康面のフォロー、地域住民との交流などについて、皆さんはどう考えるか議論しました。そして最後に、それはどのようなまちなのか、みんなが秩父に住みたくなる、移住後に友人に年賀状に書きたくなるようなキャッチコピー（『〇〇〇〇なまち秩父！』など）をグループの皆で考え発表を行いました。

A チームまとめ発表

キャッチコピー

Made in 秩父 ～Only one のライフスタイル～

・テーマは「仲間」。知り合い、友達、仲間がいることが住むうえでは重要であると考えた。
→人が集まる場所を作ることが大切である。
・秩父にはお酒、野菜等「秩父ブランド」の商品がたくさんある。
・「住まい」、「仕事」、「サードプレイス」の三つのキーワードで住みたくなる、行ってみたくなるまちづくりを考えた。

〔住まい〕
・「誰もが使える」をコンセプトに、多世代が使えるシェアハウスをつくる。
・知り合いのいる店を紹介するなど、知人関係を軸としたホームステイ制度等をつくる。

〔仕事〕
・一か月～二か月間、働きながら秩父での生活が体験できるシステムをつくる。
→リゾートバイトを中心に若者を呼び込む。
・「秩父ブランド」の商品の製造や栽培を、住み込みでできるようになれば、それが仲間をつくる土台となり、また日常生活も味わうことができる。
→「秩父ブランド」のオリジナル商品で仕掛ける！

〔サードプレイス〕
・野菜づくり等、豊島区でなく秩父だからこそできる趣味を共有できる場の創出。
→秩父の魅力を活かした余暇の過ごし方の基盤を創出する。

B チームまとめ発表

キャッチコピー

つながるまち 秩父！

・「コミュニケーション」、「交通」、「自然」、「若者」、「生活」、「仕組み」、「食と農」この７つをキーワードにまとめ、住みたくなるまち、行ってみたくなるまちについて考えた。

〔コミュニケーション〕

・毎日自由に集まれる場があり、身近なご近所付き合いが温かいと住みたいと思える。

〔交通〕

・池袋と秩父を気軽に行ける環境を構築できるような、システム・仕組みを確立する。

・池袋⇔秩父間を高速バスで行けるなど、さらなる交通インフラを整備する。

〔自然〕

・自然と一緒に静かに過ごせる環境、またアウトドアなどアクティブに生活できる環境など、双方を兼ね備えている秩父の強みを生かし、非日常の空間づくりを強めてほしい。

〔若者〕

・自然環境を活かしたスポーツ施設をつくり、部活・クラブチームの合宿所としての誘致、取組みを盛んにする。そのことで新たな雇用も期待できる。

・子どもの遊び場施設（運動公園や、アミューズメント施設等）を充実させてほしい。豊島区にはこのような施設が少ないため、秩父にこれらがあれば大きな魅力となる。

〔生活〕

・生活のしやすさも重要である。

・山間地に宅地を広くとれる規制緩和を実施する。

・都心や他県にいる家族を秩父に招待できる宿泊施設をつくる（空き家を活用）。また宿泊費も安く済むような料金設定ができればなおさら良い。

〔仕組み〕

・豊島区と秩父市相互に、無料で使える駐車場をつくる。

・秩父の子どもが、豊島区の公立学校に入学でき、また豊島区の子どもが秩父の公立学校に入学できるシステムをつくる。（入学金や授業料の補助も盛り込む）

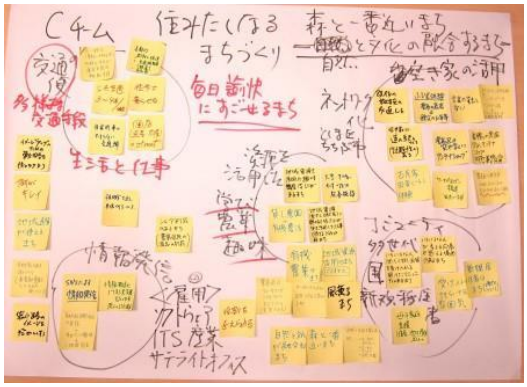
〔食と農〕

・「農家民宿」をつくる。行きたいときに秩父に行き、併せて秩父の農家で採れた作物を味わうことができるような環境があれば行ってみたくなる。

C チームまとめ発表

キャッチコピー

森と一番近いまち！自然と文化の融合するまち！

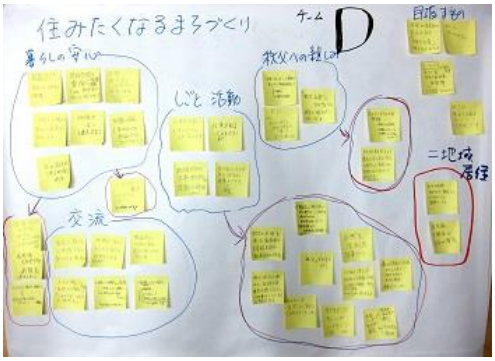


・豊島区に６０年住んでいるが秩父のことをあまり知らない。
→秩父の情報がうまく発信されていない。まずはそこを強化する。ＳＮＳの活用や豊島区の広報に秩父の情報を載せてもらう等工夫をする。
・いきなり移住は難しいと考えている。「二地域居住」を前提に、それを実現できるシステムを整備することから始めるべきである。
・多様な交通手段があることが望ましい。
→「なぜ、豊島区に住んでいるか」→便利だから→いきなり交通が不便なとこに住むのは厳しいと考える。
・秩父の空き家を活用し、大学・カルチャー・教養施設を作ることで「自己実現」の場が多くあると魅力を感じる。また、話題性のある「道の駅」があっても良い。
・「秩父の情報発信を強める」という意味合いから、豊島区側も空き家を活用し、秩父のアンテナショップを作る。→秩父を豊島区民にとってより身近なものへと。
・「住まい」のインフラも必要。
→有志を募り「シェア別荘」なるものを作り、第二の故郷化の取組みを行う。
・多世代コミュニティ、外国人も含め受け入れ体制を整える。
・「毎日愉快に過ごせるまち」が理想的である。
・まずは、補助金を出してでも「具体例」をつくることが大事である。

D チームまとめ発表

キャッチコピー

最も近い大自然のまち！チョウ、チカイ、ブラリ、シゼン



・高齢になっても買い物ができる、病院が近い、交通手段が便利など、「暮らしの安心」は必要不可欠である。
・移住者が地域に受け入れられ、各々その地域にとっての役割があることが大切である。
・インキュベーション施設を設置し、起業家を支援する。
・お祭りなどのメインイベントを秩父市・豊島区共催で行う。→相互に対する情報発信にもつなげることが期待できる。
・ＳＬを秩父から池袋まで走らせ、ひとつの名物とする。
・首都圏災害発生時の豊島区民の避難場所を秩父市にする。
・木工や秩父の野菜を使った飲食店など、秩父の自然環境を活かした仕事の創出をする。
・まずは「二地域居住」から。これを通して農業や林業を体験できるような仕組みづくりを強化する。もしくは、家具職人や伝統工芸人などが学べる学校や環境も併せて設立し、秩父ならではの職業に就ける流れやルートをつくる。

E チームまとめ発表

キャッチコピー

まつりで育てる！わたしの秩父暮らし！

・秩父は「夜祭」や「川瀬祭」など「祭り」がとにかく大きな魅力である。（年間で約３００開催しているほど盛んである）
→この「祭り」を最大のキーワードとして、まちづくり考えた。
・１回限りのイベントでなく、様々な分野において継続したイベントを共催で育てていくことが大事であ

る。これを通して何回も秩父に来ること、この秩父の魅力を通して定住につなげる仕掛けを展開していく。

・やはり居住するとなると病院、交通、教育施設など一定の暮らしやすさは必要である。

・子ども達が遊びに来ることができるような宿泊施設をつくる。区民にとって『第二の故郷』となるような位置づけが目標である。

・生きがいの場も必要である。→都内の人が、秩父で教室を開く。教室は空き家を活用する。

・自然や祭を通して、とにかく一回きりで終わらせるのではなく、リピートさせることがまず大切であると考える。

３－５　　第５回ワークショップ　－本発表会－

秩父市長・豊島区長へ住民提案による『生涯活躍のまちづくり提案書』の提出、各チームによる政策提案発表、パネルディスカッションを行いました。

（１）開催概要

◆開催日時：平成２８年 １２月１０日（土）　午後２時００分～４時００分
◆開催場所：豊島区役所 本庁舎５階 ５０７～５１０会議室
◆参加人数：47 名（職員除く）
◆次　　第：　１．豊島区長挨拶
　　２．『秩父市・豊島区 生涯活躍のまちづくり提案書』の提出
　　３．各チームからの提案発表（５チーム）
　　４．全体発表・まとめ報告
　　５．パネルディスカッション
　　６．秩父市長挨拶

（２）豊島区長挨拶

本日は「地方居住を考えるワークショップ」の成果発表会に多数ご参加くださいまして誠にありがとうございます。

先日、「秩父夜祭」を含む全国 33 の「山・鉾・屋台行事」がユネスコの無形文化遺産に登録されることが決定しました。長年の『姉妹都市』である秩父市が悲願を達成されたことを心からお祝い申し上げます。

このワークショップは秩父市と豊島区との「生涯活躍のまち」構想を実現するための第一歩として公募の豊島区民と秩父市関係者、そして立教大学と大正大学とのご協力により実現いたしました。

思えば、２年前、長年の友好姉妹関係にある秩父市と豊島区が共に消滅可能性都市と名指しされました。しかし、その指摘に対しては真摯に向き合い、私達は「地方との共

生」を対策の柱に据えて、お互いが共に発展していくにはどうしたらいいかを真剣に考えました。そして、秩父市と豊島区で生涯活躍のまちづくり構想を検討しようということになったわけであります。

７月２３日の三菱総合研究所の松田智生先生の基調講演「ピンチをチャンスに変える、生涯活躍のまち～いつまでも輝けるひと～」をスタートに、７月３０日には、現地見学ツアーとして秩父の魅力を探るべく秩父市の景勝地をまわりました。

８月２０日にはグループワークの１回目として、「どうすれば姉妹都市としての交流が深まるか？」をテーマに皆様とアイデアを出し合いました。８月２７日には「生涯活躍のまちとして、住みたくなるまちづくりとは？」をテーマにどうしたら住みたくなるまち、行きたくなるまちになるかを検討いたしました。

４回にわたった「地方居住を考えるワークショップ」で出された提案、検討に基づき、今回の成果発表会とあいなりました。

本日は、秩父市からは久喜邦康秩父市長もお見えになっております。参加者の皆さんから、秩父市と豊島区に対し「政策提案書」も出されると伺っております。ワークショップに参加された皆様から、どのような政策提案がなされるのか、成果発表とともに、とても楽しみに、そして期待をしております。

最後に秩父市と豊島区がますます発展していくとともにワークショップ参加者皆様のご健勝を祈念いたしまして、ごあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

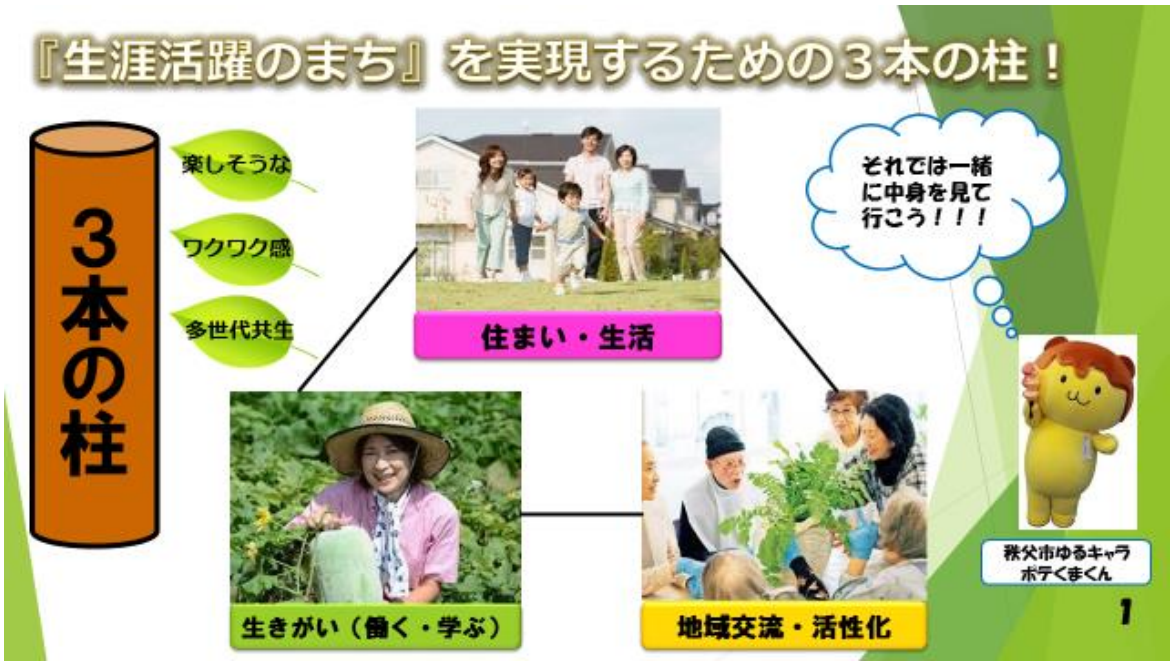
（３）『秩父市･豊島区　生涯活躍のまちづくり提案書』の提出

ワークショップでの成果を取りまとめた『秩父市・豊島区　生涯活躍のまちづくり提案書』が、グループワークでファシリテーターを務めた青木美恵さんから高野之夫豊島区長と久喜邦康秩父市長に提出されました。

高野区長は「秩父市とは、３３年来の姉妹都市であり、この提案をひとつでも多く実現し、今後も友好関係を深めていきたい。」と話されました。

（４）全体発表･まとめ報告

秩父市・豊島区
共催企画
秩父市・豊島区『生涯活躍のまち』
～全体提案・まとめ～
TOSHIMA
International City of Arts & Culture
ワークショップ参加者一同


『生涯活躍のまち』を実現するための３本の柱！
３本の柱
楽しそうな
ワクワク感
多世代共生
住まい・生活
それでは一緒に中身を見て行こう！！！
生きがい（働く・学ぶ）
地域交流・活性化
秩父市ゆるキャラ
ポテくまくん
1

提案１　住まい・生活

～『多世代共生』様々なニーズに合わせた住まい・コミュニティを形成～

- 各世代の生活ステージに合った多様な住まいと、健康・医療施設や子どものための遊び場等、その周辺環境を整備したい。それに併せて、老若男女問わず移住者と秩父市民がスムーズに溶け込めるようなコミュニティを形成する。

2

【実現のための具体的な意見・要望】

- 秩父市の家庭での「ホームステイ」を実施する。
- 秩父市民と豊島区民が交流できる「シェアハウス」をつくる。
- 空き家を活用した民泊を実施し、二地域居住（ウィークエンドシティ秩父）に繋げる。
- 温泉宿泊施設や、高齢者向け住宅を充実させる。

3

【実現のための具体的な意見・要望】

・公共交通網のないところにボランティア民間ドライバーやコミュニティバスを手当し、「自家用車がなくても暮らせるまち」にする。
・秩父市の空き家情報をネットワーク化し、活用しやすいものにする。
・健康維持のためのスポーツ施設や教育施設、医療施設を充実させる。
・カフェ、食事処、スパ等「自由に使え、毎日行ける場所」を充実させる。

4

提案２　地域交流・活性化

～秩父＆豊島の『地域資源』を活かし、継続的な交流の輪を広げる～

▶ 小学校間の交流の場づくりなど、若者の出入りが増える取組みを強化する。秩父＆豊島でコラボイベントを企画し、季節問わず豊島区民をはじめとする多くの人が秩父へ訪れる施策を行う。「点の交流」から「線の交流」へと繋げることを目指す。

5

【実現のための具体的な意見・要望】

・秩父市に『としま区民果樹園』や『としま区民農園』を秩父市につくる。
・秩父市に豊島区民の誕生記念樹を植樹する場所を設ける。
・個人商店を再生し、『番場通り』等の商店街に活気をもたせる。
・池袋に秩父市のアンテナショップを設置する。
・遠足、林間学校、対抗運動会を秩父市で開催し、小中学校同士の交流の場をつくる。

もちろん秩父市民の半数以上の方も「自然環境」「地域文化」が秩父の強みと感じているよ！

6

【実現のための具体的な意見・要望】

・木工、銘仙織物等、秩父の伝統芸能を体験できる仕組みをつくる。
・『アニメの聖地』という共通点を活かしたコラボイベントを開催する。
・秩父市の『夜祭』等、歴史・文化イベントに豊島区民を招待する。
・『一日秩父市民・豊島区民』等お互いの日常が体験できる仕組みをつくる。
・秩父市で開催される様々なイベントに「豊島区民利用優待券」をつける
・西武鉄道に協力を依頼し池袋～秩父間を片道６０分で行けるようにする。
・豊島区⇔秩父市間の高速道路を使ったバス便をつくる。

秩父では、なんと年間で約300以上ものお祭りが開催されているんだ！

7

提案３　生きがい（働く・学ぶ）

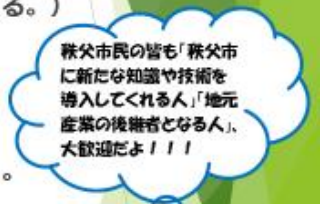
～秩父だからできる！
誰もが活躍できる自己実現のまちへ～

▶ 移住者の多様な働き方を支援する仕組み、システムを構築する。生涯活躍できる仕事と出会える環境を整えていきたい。また、多世代が知的好奇心を満たすことができる様々なジャンルの学習環境を創造する。特に「学びの場」だけでなく、「教える場」もつくることで、活動の場を広げていきたい。

8

【実現のための具体的な意見・要望】

・秩父ならではの仕事を創出する。（農林業、秩父ブランドの創造・開発）
・『ちちぶ企業体験プログラム』をつくる。（資金援助や、週末だけの利用、売り場のシェア等、セカンドビジネスにも対応できるような優遇措置をとる。）
・情報産業のサテライトオフィスで、移住しても働ける環境を構築する。
・豊島区民が秩父市の教育現場で講師ができる等の「教える場」をつくる。
・秩父市にサテライト大学をつくる。
・ネットを介して、様々な分野の高度な教育を受けられる環境を充実させる。



9

「3本の柱」実現に向けて！

～『姉妹都市』としての情報発信・ＰＲ強化をする～

- 文化や自然など、お互いの魅力を相互に認識するための、情報共有と魅力の発信を強化し秩父の多様な魅力を「住みたくなるまち」、二地域居住、移住へと繋げていく。

10

【実現のための具体的な意見・要望】

・秩父の魅力を発信する専門のＮＰＯ法人等を設立し企業と連携して魅力を発信する。
・秩父と豊島がお互いにシェアできる媒体を作る（専用サイト・アプリ・ＳＮＳなど）
・ラジオ局を開設して、秩父市の地域コミュニティを活性化する。

秩父の多様な魅力を発信し「住みたくなるまち」へ繋げる！

11

１．「多世代共生」様々なニーズに合わせた住まい・コミュニティを形成

２．秩父＆豊島の「地域資源」を活かした継続的な交流の輪を広げる

３．秩父だからできる！誰もが活躍できる自己実現のまち

このように、私たちは３つの柱にまとめました。

秩父市民と豊島区民が交流できるホームステイの実施、「アニメの聖地」という共通点を活かしたコラボイベントの企画、秩父ならではの働く場をつくるなど、豊島区民と秩父市が「生涯活躍のまち」になれるような提案が多数挙げられました。さらに、これらの実現に向けて「姉妹都市」としての情報発信・PR 強化をはかり、秩父の多様な魅力を「住みたくなるまち」、二地域居住、移住へとつなげていきます。

「共生のまちづくり」こそが『生涯活躍のまち』ひいては、秩父市・豊島区だけでなく「日本全体の元気」につながり、また、それが日本全体に広がっていくきっかけになることと、私たちは確信しています。

（５）パネルディスカッション

ワークショップに参加された秩父市・豊島区を代表する５名の方がパネラーとして登壇していただきました。本発表会でのまとめ発表も踏まえて、どのようにすれば秩父市が「生涯活躍のまち」として、豊島区とともに発展していけるかということについてご意見いただきました。

生涯活躍のまちづくりのポイントは「人」：岡修爾さん

今回のワークショップに参加し、秩父市には伝統工芸や祭り、自然など豊島区にないものがたくさんあることがわかった。また、「私にも何かできないか？」と好奇心を掻き立てられた。

夜祭での件も踏まえ、日本だけでなく世界が秩父に注目し始めることになる。「世界の中の秩父」として、どうまちづくりができるか、またこのまちづくりにどう「生涯活躍のまちづくり」を盛り込んでいくか、これが上手く入り込んでいけば皆も「よし、ちょっと行ってみるか」となるのではないか。

生涯活躍のまちづくりのポイントは「人」であると感じた。ワークショップに参加された方でも良いし、もっと多くの方を巻き込んでいき、「点の交流」ではなく「線の交流」につなげていく施策を考案することが重要。そして、仲間がいてこそ「まち」は栄えていく。色々な情報を共有していくためにも、仲間づくりができる環境を整えていくことが望ましい。

また、例えば「リモートオフィス」を秩父市に作るのはどうだろうか。週３日は秩父市で仕事をする。特に女性が秩父でリモートオフィスで働きながら秩父で子育てもでき、週２日は区内へ通う。このようなことにもトライすることによって、人の交流というものを進めていっていただきたい。

いかに「本気になれる人」が現れるか：石森宏さん

私は、埼玉県熊谷市で 1.5ha の畑を 18 年間やっており、この経験も踏まえお話させていただく。まずは、概念として樹木がある。樹木の下には根っこがある。根っこの部分はどうしても見えないため見落としがちである。この根っこの部分というのは土台となるわけだが、そこの部分を誰がやるのかということが私は一番大事だと思う。今日の話でも仕事がないと、特に高齢者、もちろん若い人も含めてだが、生きがいだとか希望だとか夢だとか、そして社会貢献したい等、やはりそれらの想いを叶えられるような仕組みが大事であると思う。

私の畑のすぐそばに、証券会社に勤めていた 40 代前半くらいの人が創業した「焼き芋屋たか」というお店がある。そして、5ha くらいの畑にサツマイモを作っており、これは完全に第 6 次産業である。自分で育てて、作って、その場で売っている。この店には皆さんが行列して買いに来ている。そういう例もある。「こんなことも、やる機会があればできるのだな」と思った。

農業は収穫して整理して出荷するということに最も時間がかかる。だから、農家というのはお年寄りが最も大事なのです。日向ぼっこしながらでも根っこを取ったり泥を落としたりというような作業が、実はお年寄りにはものすごく向くのではないかと私は思っている。私は、お年寄りは「非効率でよい」と思っている。時間がいくらかかっても構わないから良い仕事をしてほしいと。若い人は「効率的」にやらなければいけない。このように、お年寄りと若い人が上手く融合すことができれば、何か面白いものができるのではないか。

今取り組まなければならないこともあるが、100 年先どんな風になるのかということを考えながら取り組んでいただきたい。我々も今回このようなワークショップがあり、様々な提案があって、これを「種まき」として将来どういうふうになるのかということをじっくり考えて取り組むと良いと思った。それには、やはりリーダーシップをとれる人、または何しろがむしゃらにやる人が出てきてくれれば本当に実現するのかなと、私は思っている。

楽しく過ごせて、またリピーターで来れるまちに：廣瀬正美さん

私は東京出身で秩父に移住して 25 年目になる。25 年間の感想言うと、秩父は非常に住みやすいまちである。やさしい人が多く、食べ物がすごく美味しい。コストが安い。星空や空気がきれい等やはり自然の魅力がある。

まず、皆様からもご意見のあった「空き家を活用しよう」という件についてお話します。9 年前に「空き家バンク」の前身の「ちかいなか　秩父」ということを始めた。当時は建設不動産関係の人が集まって、この空き家に夢をもって二地域居住とい

うところから始め、だんだんとコミュニティが出来上がってきた。秩父市に「移住促進担当課」ができるということで、今までは産・官・学でやってきていたが、これからはもう少し広がっていき、色々なところにスポットが当たって仕組み化されていくと思っている。

次に、意見の多かった「働く面でのサポート」について。秩父には「ファインド秩父」というものがある。起業者を中心とし産・官・学に金融が入った連携事業でして、これをワンストップでひとつの事業として成果を上げるまで取り組みましょうという流れのものを作っている。中小企業診断士や商工会議所も絡んで、ビジネスを成功させようというようなものである。これは、もちろん移住者にも利用でき、移住者が秩父でお店を出そうとしたときに、どんな事業計画をたてて、どんなものが売れていくかなどのアドバイスと数値管理もフォローしていくというような仕組みのものである。移住者される方へもきっとプラスの要素となるのではないかと思っている。

次に交通の面で考えているのは、東飯能駅を起点に、川越方面ですとかハ王子方面へつなぎ、池袋と秩父を行き来できるというもの。この起点ができればビジネスの面、観光の面、学業の面においても広範囲な選択ができるようになるのではないかと思っている。

そして「生涯活躍のまちづくり」について。私が思う「生涯活躍のまち」というのは大阪にあるUSJにちょっと似たような「夢のあるまち」をイメージしている。楽しく過ごせてまたリピーターで訪れるという形を理想としている。また「癒しの空間」という要素を、秩父のまちづくりに取り入れることができれば面白いものになるのではないかと思う。

趣味と健康と仕事と自分スキルアップについて人間は欲があり、このバランスをどうとっていくかということが、これからの楽しく幸せな人生のポイントになると感じている。

「多世代」その中でも若者に期待：大島博明さん

私は、秩父は本当に魅力的な地であると感じている。秩父と豊島区はそれぞれ魅力的なところがあり、それぞれ逆のベクトルで動いている部分もあるので、組み合わせとしては素晴らしい関係があるのではないか、そのようなポテンシャルを秘めた関係だと思う。

まず、秩父のことを話すと、夜祭も含め色々な良い点はあるのだが、なかなかその情報発信が上手くできていないため、トータルな情報発信というものが必要となってくると感じている。そのような中でも、最終的には「人」が情報をつないでいく必要がある。人がいつもつなぎ役になっていないといけない。例えば、今日参加している

皆さんがつなぎ役になって、秩父・豊島の両方の関係をつなげるようになればもっとよくなるのではないかなと思っている。２つのベクトルが「共生」というかたちでつながっていくことは良いことだと思う。

今の時代はスローライフといった感じで農業や自然体験など、若い人はこちらに目を向け興味を持っていると思う。豊島区のデータでもお年寄りよりも若者の方が移住に興味を持っているということを知り驚いた。なので、若者に期待をしている。

また、秩父と豊島を結ぶ西武鉄道にも協力してもらえれば理想的である。

「行く仕組み」を作ることが大切：菊池萌花さん

私が豊島区という地域に目を向けるきっかけとなったのは、千川にある高校に通うことになったのがきっかけである。コミュニケーション学科で、そこでコミュニティデザインという授業を受けたことで、まちづくりや地域活性化ということに興味をもった。そして、初めて秩父に行ったのは大学１年のときで、宿題で「一人旅に行く」ということがきっかけだった。西武線沿線に住んでいたということもあり、目的場所を秩父に決めた。そのときにゲストハウスに泊まり、オーナーさんも一緒に住んでいる人もやさしく、大変居心地が良かった。この点が秩父を一番好きになった要因である。その後も何回も秩父に行ったが、いつも現地の人が優しく、秩父は良い人たちばかりだなというイメージ。豊島区に関しては、今通っている大正大学自体が地域活性化に取り組んでいる大学であり、区長を招いて豊島区の地域の現状等について授業をしていただいたことで、まちづくりの中でも「豊島区」という地域に関心を深めていった。豊島区の取り組みについて知っていくなかで「豊島区って良いまちだなぁ」と思うようになっていった。

ただ、豊島区と秩父市が「姉妹都市」というのを知ったのは最近であり、やはりここの知名度が低いなと感じた。豊島区の伝統工芸品の「すすきみみずく」の材料となるすすきは秩父で作っていることなど、随所につながりを感じた。私は、お互いの地域に実際に行ってみることでその土地を好きになったので、やはりどんなきっかけでも良いから、まずは実際にその地域に行ってみることが大切であると感じている。なので、一番大切なのは「行く仕組みをつくる」ことだと思う。

（６）秩父市長挨拶

今回の発表・提案を受けて私自身も大変勉強になった。ありがとうございました。

豊島区は若い人が多く、すなわちビジネスパーソンが多い。そして秩父市は何と言っても自然、そして豊島区とはまた異なった祭りなどの伝統行事、このような異なった環境の中で 33 年間も「姉妹都市」という関係が続いているということは本当に素晴らしいことであると思っている。そのような中で、今回の提案もあった「職員の交流」ですが、４月から区長様のご理解のもと、それが実行できるのではないかと思っている。情報発信という面においても、まだまだ多くの課題を残しているなかで、秩父市の職員を豊島区に配置するということを４月から具体的に実行できることではないかと思っている。色々な交流を続けている中でも、まだまだ情報発信が弱いということで、私自身もケーブルテレビ等で秩父の魅力を発信していきたいと思っており、また区報や市報をもってお互いの様々な情報を発信していくことができればと思っている。

また、井ノ尻住宅という市営住宅があり、ここの市営住宅は市民だけでなく豊島区民でも使える市営住宅となっている。これをまずは「二地域居住」の具体的な第一歩としてスタートしていきたいと思っている。

また、振り返ると今回のワークショップでも多くのことを勉強させてもらった。立教大学セカンドステージ大学の坪野谷先生をはじめ、受講生の皆様に心より感謝申し上げるとともに、ご参加されました豊島区民の皆様、また秩父市民代表ということで様々な方面から参加されました皆様に心から感謝申し上げ、豊島区と秩父市がこれからも長らく堅い絆で結ばれることを心から祈念し、協力させていただくことをお約束させていただきながら、お礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

秩父市・豊島区
生涯活躍のまちづくり提案書

秩父市・豊島区共同

「地方居住を考えるワークショップ」参加者一同

○生涯活躍のまちづくり提案（要旨）

秩父市長　久喜　邦康　様
豊島区長　高野　之夫　様

2014 年、秩父市と豊島区は「消滅可能性都市」の指摘を受け、このピンチを乗り越えるためには、都市と様々な地域がともに成長・発展し、共存共栄を図っていくことが必要であると考えました。そのため 33 年来の『姉妹都市』である秩父市と豊島区は、ワークショップを開催し検討を進めてきました。共生のまちづくりこそが『生涯活躍のまち』ひいては日本全体の元気につながると私たちは確信しています。

つきましては、秩父市と豊島区の『生涯活躍のまちづくり』の今後のあり方について、次のとおり提案します。

「地方居住を考えるワークショップ」参加者一同

●提案1

～『多世代共生』 様々なニーズに合わせた住まい・コミュニティを形成～

【住まい・生活】

各世代の生活ステージに合った多様な住まいと、健康・医療施設や子どものための遊び場等、その周辺環境を整備したい。それに併せて、老若男女問わず移住者と秩父市民がスムーズに溶け込めるようなコミュニティを形成する。

【具体的な意見・要望】

- 秩父市の家庭での「ホームステイ」を実施する。
- 秩父市民と豊島区民が交流できる「シェアハウス」をつくる。
- 空き家を活用した民泊を実施し、二地域居住（ウィークエンドシティ秩父）に繋げる。
- 秩父市の空き家情報をネットワーク化し、活用しやすいものにする。
- 温泉宿泊施設や、高齢者向け住宅を充実させる。
- 公共交通網のないところにボランティア民間ドライバーやコミュニティバスを手当てし、自家用車がなくても暮らせる街にする。

- 健康維持のためスポーツ施設や教育施設、医療施設を充実させる。
- カフェ、食事処、ジム、スパ等『自由に使え、毎日行ける場所』を充実させる。

●提案2

～秩父＆豊島の『地域資源』を活かし
継続的な交流の輪を広げる～

【地域交流・活性化】

小学校間の交流の場づくりなど、若年層の出入りが増える取組みを強化する。秩父＆豊島でコラボイベントを企画し、季節を問わず豊島区民をはじめとする多くの人々が秩父へ訪れる施策を行う。「点の交流」から「線の交流」へと繋げることを目指す。

【具体的な意見・要望】

- 秩父市に『としま区民果樹園』や『としま区民農園』をつくる。
- 秩父市に豊島区民の誕生記念樹を植樹する場所を設ける。
- 自然農法体験ができる環境を整備する。

- 個人商店を再生し、『番場通り』等の商店街に活気をもたせる。
- 池袋に秩父市のアンテナショップを設置する。

- 遠足、林間学校、対抗運動会を秩父市で開催し、小中学校同士の交流の場をつくる。
- 両市区の子ども達が自然の中で遊べるような『プレーパーク』を秩父市に設置する。

- 木工、銘仙織物など、秩父の伝統芸能を体験できる仕組みをつくる。
- 秩父の豊かな食文化を楽しめるよう『秩父ローカルグルメツアー』を開催する。
- 『アニメの聖地』という共通点を活かしたコラボイベントを企画する。
- 秩父市民が、織物、そば打ち等を豊島区民に教えるイベントを開催する。
- 『一日秩父市民』『一日豊島区民』等お互いの日常生活を体験できる仕組みをつくる。
- 秩父市の『夜祭』等、歴史・文化イベントに豊島区民を招待する。
- アートカルチャー都市構想の「劇場都市」関連イベントに秩父市民を招待する。
- 秩父市で開催される様々なイベントに「豊島区民利用優待券」をつける。
- 秩父札所巡り、木のおもちゃ等、また食文化を活かした交流などを積極的に広報する。
- 山登りや川遊び等、秩父の自然を活かしたアウトドアレジャーの魅力をもっとＰＲする。

- 西武秩父から池袋までノンストップの特急を走らせる。（ノンストップ秩父号）
- 西武鉄道に協力を依頼し将来的には池袋～秩父間を片道６０分で行けるようにする。
- 秩父鉄道ＳＬを西武線経由で池袋まで走行できるようにする。
- 豊島区⇔秩父市間の高速道路を使ったバス便をつくる。
- 両市区に提携駐車場をつくる。

- 豊島区と秩父市間で、職員の相互派遣（人事交流）を開始する。

●提案３

～秩父だからできる！誰もが活躍できる自己実現のまち～

【生きがい　～　働く、学ぶ】

移住者の多様な働き方を支援する仕組み、システムを構築する。生涯活躍できる仕事と出会える環境を整えていきたい。また、多世代が知的好奇心を満たすことができる様々なジャンルの学習環境を創造する。特に「学びの場」だけでなく、「教える場」もつくることで、活躍の場を広げていきたい。

【具体的な意見・要望】

- 秩父ならではの仕事を創出する。（農林業、秩父ブランドの創造・開発）
- 情報産業のサテライトオフィスで、移住して働ける環境を構築する。
- 『ちちぶ起業体験プログラム』をつくる。（資金援助や、週末だけの利用、売り場のシェア等、セカンドビジネスにも対応できるような優遇措置をとる。）
- 安心、安全な作物を作れるような場所・環境を広く設ける。
- 家庭菜園等で作った作物を販売できる場所を設ける。

- 豊島区民が秩父市の教育現場で講師ができる等の『教える場』をつくる。
- ネットを介して様々な分野の高度な教育が受けられる環境を充実させる。
- 秩父市にサテライト大学をつくる。
- 秩父で木工や自然について学べる場をつくる。

『３本の柱』実現に向けて！

～『姉妹都市』としての情報発信・PR強化等

文化や自然など、お互いの魅力を相互に認識するための情報共有と魅力の発信を強化し、秩父の多様な魅力を「住みたくなるまち」、二地域居住、移住へと繋げていく。

【具体的な意見・要望】

- 秩父の魅力を発信する専門のＮＰＯ法人等を設立し企業と連携して魅力を発信する。
- 秩父と豊島が互いにシェアできる媒体をつくる（専用サイト・アプリ・ＳＮＳなど）。
- ラジオ局を開設して、秩父市の地域コミュニティを活性化する。

『秩父市民と豊島区民が地方居住を考えるワークショップ』チームＡ提案

2016 年 12月 10日
Ａグループ：ファシリテーター　青木美恵

キャッチフレーズ
『made in 秩父　～ only one のライフスタイル ～』

はじめに

チーム A のテーマは「仲間」：知人、友人、すなわち「仲間」がいることが生活する上では最重要ではないか。秩父市と豊島区は姉妹都市「仲間」である。個人レベルでの「仲間」を意識することで、お互いの町を行き来することにつながるのではないかと考えた。

提案の目的　～秩父市＆豊島区のイメージアップ～

どちらも人を求めている
豊島区は F1 層と呼ばれる若い女性や子育て世代の人たち、秩父市は全体的な人口増加

どちらも活かせる資源を持っている
豊島区は繁華街・交通網・大手企業、秩父市は自然・伝統行事・土地

人と資源をうまく活用することにより、双方のイメージアップをはかり、行き交う関係ができる、結果として移住希望者増加が期待できるのではないか

提案１　市区連携のイベント企画運営

問題点　共同のイベントが少ない

具体的にイベント案をあげてみたい。

①移住体験プログラム
新しい施設を作る必要はない、行政による物件の手配・空き家を利用して無料 or 低価格でお試し居住、または暮らしの提案～シェアハウス・ホームステイ・長屋暮らし・二地域居住など今ある資源を有効に利用、特に秩父での古民家での居住体験は人気が出るのではないか。
②起業体験プログラム
行政が起業をサポート～資金援助や、空き店舗・空きオフィスを有効利用～例えば週末だけの利用・売り場をシェアするなど、セカンドビジネスとしても始められるように優遇措置をとる。

③祭り体験プログラム
ここでは「お助け隊プログラム」と命名。お祭りといえば秩父市のイメージが強いが、豊島区にも祭りは多い。大きな祭りだと組織がしっかりしていて人手不足にはならないが、小さな祭りの場合、運営のスタッフが足りない場合もあると聞く。そんな祭りにスタッフとして参加し、地元のひとたちと交流をはかり、お祭りを盛り上げる。祭りから始まり、やがてそれが大きな輪になれば、ボランティア活動やＮＰＯ活動などにもつながるのではないか。
④歴史体験プログラム
秩父市には自然だけではなく、秩父神社など歴史的建造物も多く存在する、特に番場町には見所が多い。豊島区も負けてはいない、かのフランク・ロイド・ライトが共同設計に名を連ねる自由学園明日館、2016 年 5 月に重要文化財に指定された雑司が谷の鬼子母神堂、お互いの魅力を知るための歴史的建造物を巡るガイドツアーを企画するのはどうだろう。

企業を巻き込んでのコラボイベントの提案

予算も多く、企画力もある企業を味方につけると、媒体での注目度もアップする。
豊島区を本社に置く「ビックカメラ」は過去に長瀞で企業とのコラボイベントを行っている。同じく豊島区に本社のある「無印良品」は、自社の家具を設置した「無印良品の家」のイベントを鎌倉や嬬恋で行っている、これを秩父でも実施してもらうのはどうだろう。本店が池袋にある「アニメイト」はアニメの聖地池袋でイベントを行っているが、秩父といえばアニメの「聖地巡礼」が有名である、まさにうってつけのコラボ企画が可能ではないか。

提案２　イメージ戦略～一本で繋がるサードプレイス～

問題点　そもそも姉妹都市という意識が薄い。

まずはキーワードについての説明。
豊島区池袋駅から秩父市西武秩父駅を一本で繋ぐ･･･これはまさに西武鉄道のイメージであろう。
ところがこの間の直通電車は、特急レッドアロー号しかないのである。秩父の住民は朝の通勤時間帯、飯能にて急行電車に乗換えなければならない。これは地元の方に聞いてびっくりの情報であった。是非とも西武鉄道さんにはお力添えいただきたい。秩父・池袋間のアクセスがもっと便利になれば、来年春開業予定の温泉施設にも豊島区民が多く訪れるであろう。その際には豊島区民のために割引券の発行もお願いしたい。

次のキーワード「サードプレイス」であるが、これは住居や職場以外に過ごす第三の場所と呼ばれる余暇時間を過ごす場所のことだ。秩父には自然も豊か、特産物も多くある。秩父には「秩父乾杯条例」と呼ばれる秩父産の地酒、ワイン、ウイスキー、ソフトドリンクで乾杯をして飲み会をスタートさせるという粋な条例もある。飲ミニケーションするには絶好の土地柄ではないか。個人的にはチームＡのメンバーも秩父にて心温まる会を催してもらった。わたしたちも経験した秩父の方たちの「おもてなしの心」

はきっと訪れる人たちに「又行きたい、又会いたい」と思わせるものになるであろう。その土地に自分の居場所を見つけることで、「何度も行きたくなる」から「いつか暮らしてみたい」と変化していくかもしれない。もちろんその際の秩父市の受入態勢のバックアップもお願いしたい。

さて、問題点に戻ろう。そもそも姉妹都市という意識が薄い･･･実は豊島区には秩父市のほかにも多くの交流都市の存在がある。秩父市は豊島区からのお誘いを待っている場合ではないのだ。秩父市民の気質としては、ついつい内向的になりがちかもしれない。しかし積極的にアピールしていかなければ、がんがん攻めている他の都市に負けてしまうのである。秩父市には今後 only one の存在として、観光案内やイベントの提案など豊島区に熱烈にアピールし続けていただきたい。将来的にはアンテナショップの開業も視野に入れてはどうであろう。

提案３　既存のモノを活かす情報共有体制

問題点　情報交換ができていない

ワークのメンバーである豊島区民から「回覧板に他の都市の企画したイベントが回ってくることがあるのに、秩父市からのお知らせは見たことがない」との意見があった。実際秩父市に行ってみると、数々の観光ポスターであるとか、パンフレットを目にする機会が多かった。それなのに外に向けての発信が弱いのでは、せっかく作った広報物が無駄になるのではないか。是非ともこの点を改善し、お互いに情報をシェアできる媒体を共同で作成すべきであろう。回覧板だけでなく、専用サイト・アプリ・ＳＮＳなど多世代にアピールすべきである。そこでは「各種イベント」「空き家情報」、「樹木のオーナー制度の情報」等のお知らせを優先的に豊島区に発信することで、「秩父市」と「豊島区」の親密度のイメージをアップさせることで、より良い関係が築かれるのではないか。

まとめ

以上三点の提案が秩父市と豊島区をつなぐ三本の矢となって、互いに影響し合い、秩父市と豊島区の交流と発展に寄与することができるのではないかと考える。

とはいえ最終的には秩父市と豊島区の人と人とのつながり、「仲間」意識を持って、行政、住民を問わず「楽しんで参加できる」ことが最も重要であろう。

これが私たちの提案する「Made in 秩父 only one のライフスタイル」である。

以上

『地方居住を考えるワークショップ』　　グループＢ提案要旨

2016 年 12月 10日
Ｂグループ：ファシリテーター　宮崎　弘行

1．グループＢ　キャッチフレーズ

つながるまち　秩父　！

キャッチフレーズについて

私たちグループＢは、秩父市及び豊島区のイメージを次のように捉えキャッチフレーズを決定した。

１）秩父市は埼玉県西部の山間地に位置する自然豊かで、フレンドリーな街であり、垂直の町をイメージする。

２）豊島区は有数な都会である、池袋を有し、Global かつ自由な気概を有する水平の町をイメージする。

３）秩父と豊島は西武線を介し、唯一１本の線で結ばれる町である。時間は 90 分と遠くもなく、近くもない。この微妙な時間が双方が求める非日常と言う貴重な時間と空間を提供することが可能な唯一の町として存在する。

４）秩父と豊島はそのイメージを対比すると対照的であり、双方が求める非日常の生活が存在することから「週末を秩父で」「週末を豊島で」過ごすことが、ON と OFF の生活を私たちに提供する「つながるまち」として存在する。

このような状況から秩父・豊島はお互いの魅力を非日常の交換と言う形で結びつくことがもっともな妥当な町であると考え「**つながるまち　秩父！**」をキャッチフレーズに据えた。

１）生涯活躍のまちとして、すみたくなるまちづくりとは

私たちグループＢでは最終のテーマである「すみたくなるまち」の為にはどのようなまちであるべきかについて下記の観点から検討し、求める姿をイメージした。

①ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力

・人間関係が面倒くさない人集るん！！（隣近所、地域）
・近所の人と共になごやかに生活できる町
・協働のまち、動けるうちは助け合う
・子育て介護を合わせて地域で助け合う
・ﾏｲﾉﾘﾃｲに（障害や貧困に）なっても生活圏の中心に居るまち
・自由に集える場所（カフェ、食事処、ジム、スパ）＊毎日行く場所がある。
・お友達、話し相手がたくさんいるといいよね。お祭り大会で常につながる。
・活気あるのがよい。
・趣味をいかせる。
・様々なジャンルの学習活動ができる。

・趣味を楽しみながら生きるまち
・何処にいてもいろいろな人とつながっていたい。

②交通
・都心と気軽に移動できる街
・交通インフラ（車がなくても住める）→民間ドライバー　コミュニテイバス
・高速道路を使ったバス便で便利になるまち
・住んでいる場所以外へも出かけやすい（都市部への買い物や遊び）
・買い物で「安い・早い」で豊島区に行ける。
・都会への移動　楽にできるとよい。

③食と農
・市民果樹園がある。（日本初？！）
・市民農園が広くてたくさんある。
・安心、安全な食べ物資源がつくれるまち
・美味しい食べ物、町の食、楽しみたし！　自然
・家庭菜園で作った作物を販売する場所がある。
・「休日」農家を支える地元市民とのつながりをつくる仕組みがある。
・農家民泊制度（行きたいときに行って、人間関係つくり）

④自然
・自然と共に静かに暮らせるまち
・老後は自然の中で過ごしたいと思う。
・自然に触れ合う機会が多い
・非日常をかかえる町
・絶景が欲しい　探すー見せる。
・総論としてはアウトドアの町　外遊び
・日帰りアウトドア
・家の近くに孫と遊べる川がある。
・カヌーで遊べる川がある、

⑤若者　欲しい！！
・フットワークの軽い若者の出入りが多い　劇団や楽団の稽古場アトリエ
・スポーツ施設、合宿に多種目可能にする。
・運動施設、自然の中でほしい、教育施設、秩父にも
・子供の多様な遊び場
・孫”ユース”中高生が住みたいと言ってくれる町

⑥生活

・生活ステージにあった多様な住居
・豊島区タウン＝秩父区民（分離してるのはどうかと思うが・・）
・豊島区、秩父市内の不動産交換を簡単なまち
・リピーター優遇の介護施設がある（ポイント制）
・山間地に宅地を広くとれる規制緩和のまち
・空き家に（経済的に、気楽に）滞在できる仕組みがある。
・子供の家族が泊まり込みができる場所がある（子供世帯のダーチャ）
・自然エネルギーで電気代、水道代がゼロのまち
・田舎でありながら医療施設が充実しているまち
・子供医療の充実

⑦仕組み（豊島への期待）
・滞在型、体験型　何度も行きたくなるプログラムを運営するＮＰＯが自治体企業を連携、運営
・豊島区に市の提携駐車場がある
・豊島区立学校に入学できる。
・豊島区にも「とまり木」を持っている。（人の集まるサロンの設営）

２）私たちが秩父に住みたくなるための提案を考える。

私たちグループＢでの議論からもたらされたキャッチフレーズ「つながる町　秩父！」であるためにはどうしたらよいか、私たちグループＢでは、そのためには、秩父を知り、好きになり、地方居住を考える町であることが必要と捉え、そのための幾つかの施策を下記のとおり提案する。

提案１．共に求める魅力は存在する。お互いをまずは知ろう！

秩父と豊島にはお互いが求める魅力がすでに多くの面で存在する。双方の魅力を集約し表現するならば、下記のとおり述べることができる。

豊島区の魅力
①グローバルで自由な空気観
②文化施設がたくさんある（大学、芸術劇場、飲食店）
③交通の便がいい（山手線に駅５つ）

秩父の魅力
①豊かな自然とフレンドリーな地域社会
②安心安全な農産物の生産と「農業民泊」等の体験機会
③お祭りなど伝統文化が大事にされている

秩父には「農業民泊」で地方の学校から、また海外からも多くの学校が訪れている。またこの「農業民泊」は人気を得て、繰り返し訪れてくるとの事であるが、豊島からの「農業民泊」はないとの事である。秩父と豊島は西武線で唯一 90 分で結ばれるまちであり、是非これらの情報の共有と魅力の発信だけでも大きな違いが生じてくる。

このことからも、交流の進まない要因は、双方に向けての情報の発信が充分ではなかったことに尽

きると考えられる。

提案２.「多世代共生」 と多様な住まい・コミュニティの形成
～秩父・豊島の非日常の体験から心の交流は始まる～

非日常の生活（＝週末を過ごす）を、まずは過ごすことから、お互いを知ることが可能と考える。そのための方向性と具体的な意見・提案は次のとおりである。まずは双方の魅力ある非日常を体験し、その魅力を知るための活動からお互いのファンとなることから交流は始まると考える。

《方向性》

- 障害や貧困になっても生活圏の中心にいられるまち
- 近所の人と共になごやかに生活できるまち
- 生活ステージに合った多様な住まいのあるまち

《具体的な意見・提案》

- ✓ 自家用車がなくても住めるまち（コミュニテイーバスの充実等）
- ✓ 農家民泊制度がある
- ✓ リピーター優遇の介護施設をつくる（ポイント制）
- ✓ 医療施設の充実
- ✓ 運動施設や教育機会の充実
- ✓ 孫〝ユース〟中高生が住みたいと言ってくれるような施策を行う
- ✓ 空き家に（経済的に、気軽に）滞在できる仕組み
- ✓ 子どもの家族が泊まり込みできる場所の整備（子ども世帯のダーチャ）

提案３．夢ある自然・歴史文化を活用
～お互いを好きになるには工夫も必要～

双方が好きになるためには、まずは双方の魅力を体験することが第一歩であるが、さらにその魅力を深めるのは、豊かな自然や、歴史文化を共有し深く体験することにある。そのためには、更なる工夫と、いくつかの施策の実施が必要と考える。そのための方向性と具体的な意見・提案は次のとおりである。

《方向性》

- 祭り大会等で、友達と常に繋がっている環境をつくる
- 自然に触れ合え、自然と共に静かに暮らせるまちにする
- 趣味を楽しみながら生きるまち
- 何処にいても、色々な人と繋がっていられるまち
- 孫とともに楽しめるまちにする

《具体的な意見・提案》

- ✓ 自由に使え毎日行ける場所（カフェ、食事処、ジム、スパ）の充実
- ✓ 『市民果樹園』をつくる
- ✓ 川遊びを中心にアウトドアをアピール
- ✓ 秩父ならではの絶景スポットを確立

提案４．アクセス・地域交流・学び・情報発信・更なる工夫
～更なる工夫で絆を結ぶ～

秩父を知り、好きになり、地方居住を考えるためには、体験するだけでは十分ではない。更なる魅力ある工夫を必要とする。インフラ整備等は当然、行政や関連機関を巻き込む大事業の展開となるが、私たちの考えた幾つかの提案には少しの工夫と努力で実施可能なものも存在する。地方居住を考えるには、更なる工夫で絆を結ぶ施策も必要であり、下記にその施策を提案する。

《方向性》

- 秩父市から池袋までにかかる時間の短縮と、交通インフラ整備（アクセス）
- フットワークの軽い若者の出入りが増えるような取組みをする（地域交流）
- 様々なジャンルの学習活動ができる場をつくる（学び）
- お互いのまちの情報の共有と魅力の発信を強化（情報発信）

《具体的な意見・提案》

- ✓ 都心や他の地域にも気軽に移動できる交通インフラ整備（アクセス）
- ✓ 秩父の子どもが豊島区立学校への越境入学制度（地域交流）
- ✓ ネットを介しての高度教育の充実、大学の秩父分校誘致（学び）
- ✓ 滞在型、体験型、何度も行きたくなるプログラムを運営するNPO 法人等を設立し、 企業と連携して魅力を発信する（情報発信）
- ✓ 豊島区、秩父市内の不動産交換を簡単にできるようにする（更なる工夫）

（最後に）

地方の魅力をどのように発信し、地域と交わっていくかは、アクテイブシニアと言われる私たちの世代にとっても生きがいに結びつく重要なことと考える。今回のワークショップに参加し、私自身が感じたことを最後に述べて提案を終える。

１） 秩父の魅力は今まで育まれてきた、豊かな自然と人の交わりにあり、従来その魅力を、魅力として充分に発信されていなかったことに現在のジレンマが存在するようだ。今回のワークショップを通じ語られた施策を中心に据え、どのように提案を展開し、周知するかが今後の最も重要な課題と思われる。

２） 地域居住には、まず第一に、豊かな自然と文化に触れ合える環境と人を受け入れるフレンドリーな住環境が前提であるが、秩父には、すでにこれらの環境が存在する。また祭りを中心とした豊かな文化と歴史を持ち、魅力を取り上げればきりがないほどである。後はこの魅力を魅力として伝えるための工夫と、今は足りない、学びや、暮らしやすさと言った、幾つかの工夫の創造が必要と考える。今回の議論で出た幾つかの提案を振り返ってみれば少しの努力で実現可能なものもある。実施される提案があるならば、継続的な施策として展開されることを望む。

３）　人口減少と空き家問題は切っても切り離せない問題であり、２ 地域居住や地域移住に対してはこれらの有効活用が重要な POINT と考える。もし秩父に私が移住するならば、ＣＣＲＣと言う地域と隔離された住居に入るのでなく、フレンドリーな地域の中に役割（それは文化か、学びか、働きかは人それぞれさまざまではあるが）を持って、地域に認められた居住者として受け入れられることを望むものである。　以上

『秩父市民と豊島区民が地方居住を考えるワークショップ』
Ｃグループ提案

2016 年 12 月 10 日
Ｃグループ：ファシリテーター　小池久雄

Ｃグループキャッチフレーズ
『森と一番近いまち！自然と文化の融合するまち！』

秩父市の自然、食、伝統などと、学び、暮らしやすさ、雇用などの文化を融合することで、「住みたくなるまち、秩父」になるとして、キャッチフレーズした。
第１回の講演、第２回の秩父市視察を踏まえ、第３回、第４回のグループワークで出た意見をまとめてＣチームの提案とする。

提案Ｃ－１　お互いの魅力をもっと楽しもう！

秩父市と豊島区の魅力は、それぞれ「自分にないもの」を補い合う関係である。お互いの魅力をより享受しやすいしくみをつくることが、交流の活性化につながる。

豊島区の魅力
①よその人を受け入れてくれる都会のコミュニティがある。
②文化施設がたくさんある。（劇場、大学、飲食店など）
③交通の便がいい。（山手線駅が５つあるなど）
　など

秩父市の魅力
①自然が豊かである。（しかし、活用されていない）
②お祭りなど伝統がある。（山車づくりの木工技術がある）
③食文化が豊かである。（そば、豚肉、日本酒など）
④地域のコミュニティがしっかりしている。（しかし、閉鎖的ともとれる）
　など

提案Ｃ－２　もっと秩父を知ろう！　もっと秩父を解放しよう！

豊島区は「秩父市をもっと知る」ことで、秩父市は「空き家活用、地域コミュニティの活性化、公共施設の豊島区民開放」などで、お互いの交流がもっと深まる。

①林間学校や遠足は、必ず秩父市に行く。

②秩父の「伝統芸能体験イベント」を、豊島区で開催する。
③秩父市の工芸品を、豊島区行事の「記念品」として積極的に活用する。
④「ちちぶラジオ局」を開局して、地域の情報を発信し、地域コミュニティをもっと活性化する。
⑤秩父市内の施設を豊島区民に開放し、市民、区民の交流を活性化する。
⑥家主は、積極的に空き家を貸し出して、二地域居住者、移住者の住宅、新規起業者の事務所などに活用してもらう。
⑦秩父市を豊島区のウィークエンドシティにする。週末は秩父ライフを楽しむ。
⑧豊島区に秩父市のアンテナショップをつくる。もっと情報発信して秩父市に呼び込む。
など

提案Ｃ－３
森と一番近いまちを楽しみ、学びたい！　自然と文化の融合するまちに住みたい！

豊島区民は、秩父市をもっと楽しみたいと思っている（自然、農業、食など）。実際、観光来訪者はたいへん多い。　しかし、移住するには「生活」に関わることを変えてほしいと考えている。交通インフラ、雇用増、開放的コミュニティ、情報発信など。これらが変化すれば、二地域居住人口、移住人口は増加し、転出抑制にもつながるはずである。

①秩父の自然を学び、楽しめる場をつくる。
②秩父の豊かな食文化を楽しめる、「秩父ローカルグルメツアー」を開催する。
③「ちちぶネイチャー大学（仮称）」で、秩父の木工や観光資源などについて学ぶことができる。
④魅力ある文化、自然をもっと積極的に情報発信する。
⑤自家用車に頼らなくとも、多様な交通手段が用意されている。（コミュニティバス、乗合タクシー、シニア割タクシーなど）
⑥情報産業の「秩父サテライトオフィス」を設置して、移住しても働ける環境を構築する。（超高速ブロードバンド整備）
⑦シニア世代が、その経験、知見を活かし、若者の起業を支援する。（シニア地域協力隊）
シニアにとっては「生きがい」になる
⑧多世代、外国人、また男女にかかわらず、開かれたコミュニティがある。
⑨子育て支援が充実している。
⑩秩父市、豊島区双方の空き家情報をネットワーク化して、活用しやすくする。
⑪西武鉄道に協力してもらい、将来は池袋～秩父市間を片道 60 分で行けるようにする。
（ノンストップちちぶ直行便）
⑫個人商店街を活性化し、楽しく散歩しながら買い物できるまちをつくる。
⑬「ちちぶ地域通貨」を秩父市、豊島区で発行し、商店街を活性化させる。

以上

『地方居住を考えるワークショップ』　　グループＤ提案まとめ

2016 年 12 月 10 日
Ｄグループ：ファシリテーター　岩熊　徹

1．グループＤ　キャッチフレーズ

気軽でオーライ（往来）！　大自然のまち　～ちょうちかい、ぶらりとしぜん

このキャッチフレーズは、90 分弱で行き来できる間柄の豊島区と秩父市をがお互いをよく知りあい、より深く交流し、未来戦略を推進する都市、豊島区と豊富な自然と伝統文化を保有する秩父市の往来人口を増やすことを起点とし、両市区間で培の相互の親しみ・愛着を培っていくことが「住みたくなるまち」へのベースとなる、との思いを込めています。

2、提案要旨

*提案１　**お互いの魅力についての認知度アップを両市区連携で推進**

まずは新旧の事柄含め、今一度お互いの持っている魅力を両市区民に認知してもらうことが必要である。昨年（平成 27 年）豊島区が実施した「定住・地方移住等に関する区民意識調査」においても、移住意向者のうち「秩父市に移住したくない」と回答した理由は、
「親しみのない場所だから」、「秩父市についてよく知らないから」」がそれぞれ 5 割弱に昇り、それぞれ回答理由の 1 位、2 位となっている。今後、秩父市への移住希望者を増やすためには、両市区が連携して、「親しみがあり」、「よく知っている」まちとなっていくことが必要なことは明白である。

＜具体的な意見・要望＞
・豊島区の優れた「利便性」を秩父市民にアピールする
　：交通網、買物、娯楽、趣味、学び、医療 etc
・秩父市の自然豊かな暮らしや活動を豊島区民にアピールする
　：農業体験（栽培や収穫など）、林業体験（木工など）、登山、トレッキング、釣り etc～
　※これらの事柄に「利用優待」を付加するなど
・豊島区の未来志向、先進性についての認知度のアップを推進する
　：アートカルチャー都市構想の「劇場都市」関連イベント等に秩父市民招待 etc
・秩父市の歴史や伝統文化、観光資源についての認知度のアップを推進する
　：夜祭への豊島区民招待 etc
　：秩父鉄道 SL を西武線経由で池袋駅まで走行

*提案２　**両市区の交流を深めるための新たなアクションが必要**

提言 1 のような形で、より「知り合うこと」を推進しながら、次なるステップとして不可欠な事象は

両市区間の交流を深化させていくことである。魅力を知る、感じるだけではお互いが「行き場、遊び場、あるいは通い場」で完結してしまう。市民と区民の交流が活性化することによって、そこにコミュニティが生まれ、地域への愛着が芽生える。両市区間の姉妹都市締結から 33 年が経過した今、姉妹都市としてのお互いの情報発信、PR等の活性化と刷新を行うとともに、新たな“交流ゴト”を企画、実施していくべきであろう。

＜具体的な意見・要望＞
・若年世代の交流促進を図る
　：小中学校同士の往来　～相互移動教室、林間学校、都心学校、対抗運動会 etc
　：豊島区プレーパークを秩父市に設置　～両市区の子供たちが自然の中で自由に遊ぶ
・多世代の交流促進を図る
　：お互いの日常生活を体験できる取組み　～1 日秩父市民・1 日豊島区民制度
　：両地区に気軽に滞在できるような場所（施設）を設置　～多世代の「交流クラブ」
　：両市区間の新たなイベントを企画・開催　～共通する「アニメ」を題材にする etc
・行政の交流を図る
　：豊島区と秩父市での職員相互出向の制度化

*提案３　**生涯活躍のまちとして住みたくなるまち＝生活諸条件＋生きがい＋地域特性**
「知り合い」、「交わり」の醸成によって育まれた親近感、愛着をバックグラウンドとして、いよいよ「住みたくなるまち」への形づくりをいかに行うかが焦点となる。ここで、まず目指す移住者のターゲットは誰なのか、ということを明確にしておかなければならない。この提言においては、シニア年代層が大半を占めたグループ D の総括であることから、そのターゲットを「元気なシニア」とする。「生涯活躍のまち（日本版 CCRC 構想）」においても、地方移住のターゲットを 65 歳以上の高齢者から 50 歳以上のシニアと変更し、より元気なうちからの移住を推進しようとしている。当提言もこの前提に立ち、「秩父市が豊島区の元気なシニア達にとって、「住みたくなるまち」となるための施策を提案する。

＜具体的な意見・要望＞
◇移住における居住・生活のための条件の整備
・利便性や安全・安心の確保が可能であること
　：居住経費の妥当性、医療環境の充実、地域内交通手段の整備
・地域内での交流があり孤立しないこと
　：居住地域でのコミュニティの存在
・移住者個々にとって、生きがい、やりがいに通じる主たる活動があること
　：就労先、新たな雇用、社会活動、創作活動などの場
※これらは、移住を行う上での「必要条件」または「標準装備」ともいうべき要素。しかし、これらが整備されたとしても、必ずしも「秩父でなければならない」という要素にはならない。秩父を選択する「秩父ならでは」の特性、言わば引きつける“磁石”となる要素が存在しなければならない。

◇秩父ならではの“磁石”となり得る要素の提供

・「利便性や安全・安心の確保が可能であること」について
　：豊島区と秩父市で災害時の相互救援・特定避難場所の協定を締結
　：住民登録、納税等の新たな制度の立案
・「帰属可能なコミュニティ～地域内での交流があり孤立しないこと」について
　：秩父のイベント（既存、今後企画ととも）に関連したコミュニティづくり
　：居住地域での元豊島区民＋秩父市民のコミュニティ形成
・「移住者個々にとって、生きがい、やりがいに通じる主たる活動があること」について
　：秩父の自然や文化を活用した仕事・活動の創出　～農業関係、林業関係、観光関係、
　　特産品からのブランド創造・開発 etc

*提案４　**豊島区と秩父市が相互で創る「二地域居住」**

提案 3 で示した、生活の必要条件が整備され秩父ならではの特性を打ち出すことができたとしても、現在の住居を整理・処分するまでには踏み切れない、また現状の生活利便性やコミュニティを捨てきれない、また移住にはどうしても不安がつきまとう、と感じる個々のケースも多いことが予測される。そこでもし豊島区と秩父市に二つの生活拠点を持てれば、現状と新たな生活の両得を味わえる展望が描けるとともに、元気なシニア達の心理面、行動面での活性剤となり、新たな生きがい、やりがいを形成するための可能性を広げることにも繋がるのではないだろうか。さらに将来は秩父が「終の棲家」となるためのステップとして、この「二地域居住」を考えることもできる。90 分弱で行き来できる「ちょうちかい」相互異空間（都心⇔自然、未来文化⇔伝統文化）は、両市区の持つ大きな強みであり「二地域居住」の最適地と考えられるではないだろうか。

＜具体的な意見・要望＞
・秩父市にいくつかの 2 地域居住拠点を設置
　：住居型、宿泊施設型などユーザーニーズに合わせた複数の居住スタイルを提案

「豊島区と秩父市、地方居住を考えるワークショップ」
Ｅグループ提案

２０１６年１２月１０日

Ｅグループ：ファシリテーター　清水　誠

【Ｅグループ】“キャッチフレーズ”

『まつりでそだてる、わたしの秩父くらし』

提案１　『豊島区と秩父市、お互いの魅力をもっと知る』

豊島区、秩父市がそれぞれの魅力を具体的に認識することでそれぞれの特性を活かした交流が展開できる。

（秩父市の魅力）
①自然：自然がすばらしい、豊かな場所、地球の窓、自然ジオパークなど
②歴史と伝統：歴史と伝統が豊富なまち（秩父神社、秩父の夜祭、銘仙織物）
③交通：都心に近い、池袋からレッドアロー号で 90 分、
④安らぎ：孫たちと遊べるまち、OFF を楽しめるまち（ON 豊島区）、人情味あるまち
⑤特徴：晴天率が高い、災害が少ないまち
課題として
①高齢者にとって住みやすいまちか。
②豊島区と秩父市、近いようで遠く感じる
③コミュニティなどの活動、活躍の場があるか、若々しいまちであるか。

（豊島区の魅力）
①利便性：コンパクト、利便性、若いまち、商業施設の充実、情報が集まる
②文化・芸術：文化・芸術のレベルの高さ、文教地区、文教施設の充実
③多様な人種・多世代：多様な人種、多世代が共生している、多文化存在
④親しみ：安らぐ場所、親しみの場所
課題として
①　豊島区民がどれだけ秩父に関心を持っているのか。

提案２　『こうすれば豊島と秩父が姉妹都市として交流が深まる』

豊島区と秩父市が双方向に良い関係を継続的に築いていくためには、特に双方の役割を明確にする必要がある。例えばシニア活躍のまち（豊島）／活力を得るまち（秩父）として ON（豊島）／OFF（秩父）を上手く切り替えることで、両地域がそれぞれの価値を高めることができる。自然、人、祭を介して交流するシニア豊島区民が秩父の営業マンとして PR できるかもしれない。

(交流のかたち)

① 学びの交流：秩父氏など秩父学をサテライト大学で学ぶ。豊島区で文化芸術を学ぶ。

② 双方向の交流：点から線へ双方向で多方面の安定的な交流

③ 青少年の交流：小学校間や青少年の交流、秩父で農業体験（ジャガイモ種植等）交流

④ IT 交流：IT を利用したバーチャルな交流

⑤ 祭：秩父夜祭を筆頭に伝統の祭が年間を通して数多く実施されている。子ども山車体験などもある。これらは交流の有効な機会である。

(活発な交流のための施策・しかけ)

① 民間と行政のすみ分け：交通、施設の確保、交流への呼びかけなど行政のリーダーシップを期待する。一方で民間・個人レベルにおける展開のきっかけをつくり、問題点を住民同士で解決し、互いに顔がみえる交流など“やらされている感”を持たない交流の姿もあることも大切である。

② 施設：秩父市の遊休住宅を利用した２地域居住の提供や交流を持つための施設、温泉宿泊施設、老人向け住宅の整備などが望まれる。さらに地盤が良いことを活かして首都圏の災害時の対策など恒久施設の整備が考えられる。

③ 区民が安らげる町：シニアにとって孫と一緒に遊べる「第二のふるさと」、「心の原点」となり、活躍のまち(豊島 ON)／活力を得るまち(秩父 OFF）と位置付ける。

④ PR 施策：札所巡礼の再開、木のおもちゃなど PR、食文化を生かした交流などの広報

⑤ 関連事業者の協力：往来を活発にするために西武鉄道の企画乗車券などを期待する。

⑦ 若者のＵターン施策：仕事と生きがいの提供、多世代共生の機運を醸成する。

提案３『生涯活躍のまちとして、住みたくなるまちづくり』

秩父のまちで出会った人が気になる、秩父のことが気にかかる、というふうに人と人の触れ合いがリピートして継続的な交流の輪が広がることを、住みたくなる街づくりの中心に据える。

秩父にはよそ者に対して閉鎖的な風習・考えもあったとされるが、伝統の祭りの運営に関わる人材不足などにより人々の考え方にも変化が現れ、よそから来た新しい人を受け入れて祭りに関わり交流が深まっていくような機運も生まれつつあるという。

(住みたくなるための条件)

①自然環境を楽しめる暮らし：自然農法体験、ジオパーク、川下り、季節の移ろい、など

②暮らしやすさ：都会ほどのものは求めないまでも基本的なインフラがある。

- 医療施設、
- 買い物（車がなくても暮らせるか、コミュニティバスはどうか)、
- 住まい（２地域居住用・空き家バンクの活用)、
- 多世代のニーズに応える居住スタイルの用意、第２の田舎（孫たちが訪ねてくる家）
- 住民と新住民がスムーズに溶け込める(受け入れる)コミュニティ、

③生きがい：何等か地域社会とのかかわりができる、

・仕事がある（賃金水準は低くても生涯活躍の意義を充たす働く場所）、
・学び・教える場（知的好奇心を満たす）、
・社会貢献・多世代の交流につながる活動の場、

④まつり：やはり秩父のコアコンピタンスは「まつり」（含むイベント）であろう。
・「夜祭」に限らず年間を通して行われる様々な「まつり」（文化・スポーツ等のイベントを含む）の機会に季節ごとに都会から人々が繰り返し訪れることで地域住民ときずなが生まれる。

⑤交流と発信
・仕掛け作りの場（農業体験、林間学校、銘仙織物体験、伝統和菓子他）を整備する。
・秩父の魅力を上手く発信しPRをすることで、体験を通じた継続的な交流が生まれ、住みたくなるまち、２地域居住、移住へと繋がる活動になる。

提案４『まつりでそだてる、わたしの秩父くらし』

豊島区・秩父市の長年の縁にもとづき、人と人をつなげる「まつり」を中心に幅広い反復・継続的な市民交流の輪を広げ、そこから住みよさと生きがいを発見し、「自分」なりの暮らし方を作り上げてゆく、**『まつりでそだてる、わたしの秩父くらし』**を提案する。

さらに言えば、秩父には、豊かな自然と伝統に育まれたいくつもの祭りがある。その準

幼少時代の遠足・林間学校に始まり、文化・スポーツ、農林業体験、観光・信仰など備や運営に必要な人手として関わり行事に参加することで生まれる仲間もある。の往来を通じて、多世代が多彩な生き方を知り、秩父が心豊かな暮らしを叶え２地域居住はもとよりやがて移住したくなるまちに発展してゆく。

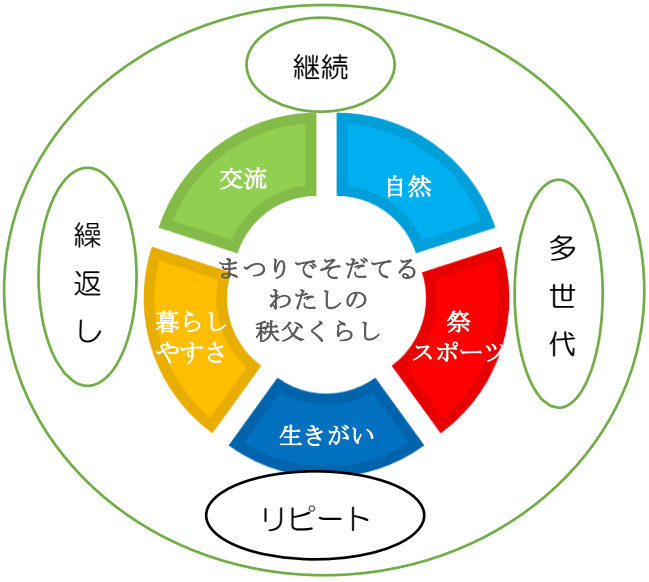
大都会でコンパクトにすべての機能が詰まった豊島区の魅力に対して、秩父にある豊富な自然と都会的な意味では、それなりの不便さが、かえって「秩父くらし」が人々を心身ともに充実したものに出来るのではないだろうか。

以上

文責：Eグループ　ファシリテーター　清水　誠

付表

『生涯活躍のまちとして、住みたくなるまちづくり



＊自然：山、川、花、ジオパーク、川下り、トレッキング、山登り武甲山
＊祭・スポーツ：夜祭、合宿、札所巡り、
＊生きがい：職場、学び、教室、社会貢献活動、空き家バンク
＊暮らしやすさ：病院・買い物・交通
＊交流：イベント、農業体験、林間学校、織物体験、和菓子作り、

まつりでそだてる、わたしの秩父くらし		
暮らしやすさ	祭・スポーツ交流・	生きがいの場
病院・買い物・交通	夜祭、イベント、合宿、 札所巡り、農業体験、 林間学校、織物体験、 和菓子作り、	職場、学び、教室、 社会貢献活動、 空き家バンク
自　然		
山、川、花、ジオパーク、川下り、トレッキング、山登り武甲山		

『地方居住を考えるワークショップ』参加者　（敬称略）

【秩父市関係者】

大　島　博　明	廣　瀬　正　美
高　野　幸　基	松　本　賢　治

【豊島区在住・在勤・在学者】

青　木　美　恵	高　橋　敬　子
石　森　　宏	高　橋　菜美子
今　田　悟　史	竹　内　康　夫
岩　熊　　徹	塚　﨑　裕　子
岩　渕　祐　子	坪野谷　雅　之
内　田　隆　彦	手　金　奈都子
大　歳　美恵子	永　江　かよ子
大　箸　　渡	中　島　ゆ　き
岡　　修　爾	名古屋　美　鳥
落　合　仁　史	野　上　正　峰
笠　原　康　次	野　田　研　一
菊　地　萌　花	長谷川　晃　世
北　川　　昇	林　　俊　雄
小　池　久　雄	福　原　正　憲
河　野　秀　樹	堀　本　恵　子
古　室　乃武男	宮　崎　弘　行
酒　井　早　苗	矢　野　泰　秀
佐　野　英　二	吉　岡　直　子
清　水　　誠	渡　邊　　漸

（地域別５０音順）

秩父市・豊島区
「生涯活躍のまちづくりワークショップ報告書」

平成 29 年（2017 年）2 月
編集　豊島区 政策経営部 企画課
〒171-8422 豊島区南池袋 2-45-1